



統

財団法人
統一團發行

次 目

聖訓摘要(完結).....	本多日生
日本人に還れ.....	井上清純
日蓮義東北開教史實(後編).....	中村謙藏
記事	
○本部圖報	
○圖費誌料維持費等領收	
大藏經要義續篇(其二十四).....	本多日生

第十四五年九月號

法團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ每ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ週達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ保持セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團畧則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金五百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五百圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要 (完結)

妙法尼御前御返事

女人は由なき道には名を折り命を捨つれども、成佛の道はよはかりけるやとをばへ候に、今末代惡世の女人と生まれさせ給ひてかゝるものをばえぬ鳥の夷に、のられ打たれ責められ忍び法華經を弘めさせ給ふ彼比丘尼には雲泥勝れてありと佛は靈山にて御覽あるらん、彼比丘尼の御名を一切衆生喜見佛と申すは別の事にあらず、今の妙法尼御前の名にて候べし。

(證道文錄二〇九〇)

本多日生

是は大事の御教訓と思ふのでありますが、法華經の中に女人の成佛を許されて、其等の女達はどうぞ私達にも法華經を弘めさせて貰ひたいと云ふことを願つたけれども、佛様はお許しにならなかつた。どう云ふ譯であるか。女が法華經を宣傳しようと云ふ志を起せば、佛は喜んでそれをお許しにならなかつた。それではならぬのであるが、それをお許しにならなかつた。それは女が餘り意味の無いやうな事には随分力を入れて自分の名譽をも忘れ、命をも捨て、鐵道往生をするやうな女は尠からざるやうに思ふけれど

も、崇高な信仰に於て、殊に佛道を成ずると云ふやうな、さう云ふ高遠の理想の爲に力を盡すと云ふ場合に「弱かりけるやと覺え候」、さう云ふ善い事には弱い爲に佛が法華經をお譲りなさらなかつたのであらう。こゝに弱かりけると云ふことは、是は女に取つては大變大切なことで、今も解放を叫んで居る婦人は強かり氣に見えるけれども、この崇高なる道には矢張弱かりけるものゝ如くに見える。そこでこの世に女に生れた貴方は、法華經を信するが爲に大勢の反對を受けて罵られ責められた、それにも拘らず左様な迫害を忍んで、自分が信する許りでなく、法華經を弘めさせ給ふ方である。是は日蓮聖人に附いて居つた婦人にはなか／＼偉い人がある、唯一人の信仰に止まらないうで法華の宣傳に従事し、夫を援けて共に々々迫害の巷に立つた者があることは、丁度昔の侍の妻が夫の忠節に力を添へた如く、又仙台萩の政岡のやうな風に、自ら命を賭けて主人を護ると云ふやうな意味が日蓮聖人に附いて居つた婦人には現れて居つたのである。そこを云ふのである。貴方は法華經の爲に罵られ責められても法華經を弘められて居る、法華經で成佛せられた女よりも貴方の方が偉いと言つて佛様は靈山淨土から御覽になつて、妙法尼のやうな偉い女があるならば法華經の宣傳を許すのであつたと、驚いて居つて下さるであらう。さうして見れば一切衆生意見佛と云ふ名前は貴方が取りになつて宜からう、今の妙法尼は法華經の女人成佛に現れた佛の名前の占有者であると思ふ。今の日蓮主義の婦人は、妙法尼の心を繼いでお釋迦様を靈山淨土で驚かせるやうに、宗教の宣傳に力を盡して、女は善い事には弱いと云ふ汚名を雪ぐ

四條金吾殿御返事

ことに努めなければならぬと思ふ。是は色々の境遇に依つて起ることでありませうけれども、いつ迄も婦人は善い事には弱いと云ふことのないやうに、この妙法尼の事を手本にしたいと思ふのであります。

抑も八日は各々の御父釋迦佛の生まれさせ給ひ候し日也、彼日に三十二のふしぎあり、一には一切の草木に花さきみなる、二には大地より一切の實わきいづ、三には一切の田島に雨ふらずして水わきいづ、四には夜變じて晝の如し、五には三千世界に歎きの聲なし、是の如く吉瑞の相のみにて候し、是より已來今にいたるまで二千二百三十餘年が間吉事には八日をつかひ給ひ候也、然るに日本國皆釋迦佛を捨てさせ給ひて候に、いかなる過去の善根にてや法華經と釋迦佛とを御信心ありて、各々あつまらせ給ひて八日を供養申させ給ふのみならず、山中の日蓮に華香ををくらせ候やらん、たうとしたうとし。(繪圖遺文録二〇九一)

是は四條金吾が、釋尊の御降誕の日に大勢寄つて御供養をしたことに付て讃めてあつかはしになつたのであります。八日は一切衆生の御父である釋迦牟尼佛のお生れになつた日である、洵にお目出たい日で、釋迦牟尼佛がお生れになつた時には三十二の奇瑞が現れた程の結構な日である。一切の經文を始め、各宗と云ふものは皆お釋迦様の教から起つたにも拘らず、眞言宗のやうな宗旨が出て、大日如來の

旗を翳し、淨土門が起つて阿彌陀如来を擔ぎ出し、禪宗が起つて教外別傳など云つて公案を興へてお釋迦様を捨てさせて居る。近頃は少し覺つて來たのか、御降誕の日には一緒にやつて居るが、その時に餘りお釋迦様を讃めると苦い顔をして居る。讃める爲に寄つたのかと思ふとそれがさういかない。今の所は阿含乘式にも釋迦様の有難い所に降伏して來たのであるけれども、その次には法華經式にお釋迦様に降伏するのである、手数の掛つた話であるが、未だ罪深くして一遍には免されざるものである。是が日蓮聖人の時には忘れて居つたから之を仰つしやるので、然るに貴方はどう云ふ善根を積んで居られるか、法華經とお釋迦様に信仰を捧げて、八日に一族を集めて御供養を爲さつたのみならず、身延の山中に閉籠つて居る日蓮にまで御供養を爲さるその心は如何にも尊いと云つてお返事をお出しになつたのであります。

春初御消息

春の初めの御悦び木に花のさくがごとく、山に草の生出るがごとしと我も人も悦び入つて候、さては御送り物の日記、八木一俵、白堊一俵、十字三十枚、いも一俵給ひ候畢んぬ、深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につもり谷は峯となり、みねは天に梯かけたり、鳥鹿は庵室に入り推牧は山にさしいらす、衣はうすし食はたえたり、夜は寒苦鳥にことならず、晝は里へ出てんとおもう心ひまなし、す

てに讀經のこえもたえ觀念の心もうすし、今生退轉して未來三五を經ん事をなげき候つるところに、此御とぶらひに命活きて又もや見参に入り候はんずらんとうれしく候(繪圖道文録二〇九二)是は殆ど身延の山に日蓮は凍え死んでしまふと云ふやうな有様であつたのに、又御供養を得て復活して信心を續けることが出來ると云ふお禮のお手紙であります、文章が如何にも結構でありますから引いたのであります。

伯耆公御房

これには引く所がない。

法華證明鈔

この中に一節も話したい所があります。上下萬人にあるいは諫め或はをどし候つるに、ついに捨つる心なく候へばすてに佛になるべしと見へ候へば、天魔外道が病をつけてをどさんと心み候か、命はかぎりある事也すこしもをどろく事なかれ、又鬼神めらめ此の人をなやますは領をさかさまにのむか又大火をいだくか、三世十方の佛の大怨敵となるか、あなかしこあなかしこ此の人の病を忽に治してかへりてまほりとなりて鬼道の大苦

をぬくべきか、其差なくして現在には頭破七分の科に行はれ後生には大無間地獄に墮つべきか、永く

とどめよとどめよ、日蓮が言をいやしみて後悔あるべし後悔あるべし。(論理道文錄一〇九六)

是は自分の弟子が病氣の折にお送りになつたのでありまして、その慰安の言葉は非常に強いので、上下萬人に或は窘められ、或は威され、色々法難に遭つたけれども、お前は捨てる氣もなくして今日迄信仰を續けて来た、法華經の行者として感心なものである。それに依つて佛に成ることは定まつて居る。

然るにそれに惡魔が病氣を附けたと云ふことならば、それは何もお前がそれに依つて命が無くなつたからと云つて心配はない。命は限りあるものでいつかは捨てなければならぬが、併し今度の病氣は訖度治ると云ふので、その意味が日蓮聖人のは非常に強いので、陀羅尼品を讀んでやると云ふのではない。お前は本當の佛敎を信ずるものであるから、鬼神惡鬼が障りをしたならば、劍を逆さに呑んで居るのであつて、その惡魔は馬鹿者である。お前は本當の行者であるから、お前に惡魔が劍を向けるならばその劍は惡魔の咽喉に立つのである。又惡鬼は大火を抱いて居るやうなものであるから、お前に邪魔をするならば懸ては大火に焼かれてしまふのである。又諸天善神は汝の味方をして居るのに、惡魔が汝の妨げをするならば、佛様なり諸天善神の敵となる。彼はそれだけの決心があるか。それとも後悔してこの法華經の行者の病氣を治して却つて法華經の行者を護つた功德に依つて惡鬼羅刹の苦みを脱れるか。それを惡魔の奴に能く聞いて御覽なさるが宜い。多分彼等は後悔するであらうと云ふことを書いてある。實に

斯う云ふ所が日蓮聖人の眞骨頭で、日蓮の日蓮たる所である。負けるも仕力がない、泣き聲を出してはいけない。命には限りがある、今死んでも後悔はないと云ふことを第一に云つて置いて、それから訖度治ると云つて、この正義を守つて居る所に生死を超越して安心立命がある。實に強い信仰である、是だけを得て置けば間違つて所はないのである。私は或る人に斯う云ふ意味を話してやつた所が、能く了解してそれで一遍に病氣が治つてしまつた。祈禱者の所へなど行くと、是は狐が憑いたのだと言つて、何だかをかき氣な事をやつて、さア狐は除いたと言つて竹の筒へ入れてころがしたりする。どうも未だ少しをかかしい、いや行き掛けましたけれども雨が降つたから戻つて來ましたと云ふやうな事を言ふ。あゝ云ふまやかしの祈禱師に瞞されてはいけない。あれは大本敎であるとか、日蓮宗の加治祈禱であるとか、一寸は瞞されるが、是は精神的變化であつて、左様な一種の妄想が頭に浮ぶので、一種の神經病的になる。何か憑いたと思へば憑いたことになる。除いたと思へば除いたことになる。除いたが又歸つて來たのぢやなからうかと云ふことになる。東京の人で縫箔業をして居る益澤と云ふ人があります、今も熱心な信者でありますが、そのお父さんが一寸初めに祈禱に迷つて、自分が手を振り出した、所が今度は女房が振り出した、息子も娘も振り出した、變だと思ひましたけれども、何しろ自分が勧めたのであるから仕方がない。餘り手を振つて仕方がないものですから私共へ來たのであります。その時は私共が布敎を始めた時であります。所が大いに悟る所があつて、家へ歸つて變な棚が拵つてあつたのもぶち

壞してしまつて、つまらない教をお前等にも勸めて皆手を振ることになつたのは先祖に對して申譯がない。先祖へ申譯の爲に俺がお前等を叩き殺して置いて最後に腹を切るのだと言つて、刀を抜いて、先づ女房から刀の背中の方でやつとやつた所が、それで一遍に治つてしまつた。さア今度は貴様だと言つて息子から娘と、何でも本當に光る刀を抜いて斬付けた、所が一遍に皆治つてしまつたと云ふので、今尚その娘さんが、大分の年でありますが四十五六でありますか、熱心な信者である。その友達の山口と云ふ人が今千葉に行つて毎月日蓮主義の宣傳をして居るのであります。そこには餘程さう云ふ研究材料がある。福來博士もさう云ふ所を御研究になると宜い。唯神祕と云つてもやつて行くとなつたこととも澤山ある。刀の光るやつを抜いてやれば大抵性根が入る譯である。日蓮主義者はさう云ふくだらうない迷信をやつてはいけない。そんな手を振つたり足を振つたりする譯のものでないと思ふ。

富木入道殿御返事

是は治病鈔でありますが、聖訓要義としてその全文を御紹介を致したのであります。

波木井殿御報

次の波木井殿御報でありますが、是は馬のことがあつて大事の所でありますから、簡単に御紹介して

置きます。是は日蓮聖人が身延を出でて池上にお出でになつて御臨終の少し前、九月十九日にお書きになつたので、十月十三日に逝かれたのでありますから僅か許り前に書かれたのでありまして、殆ど是が絶筆に近いのであります。後にも文章は色々あります、日蓮一期弘法とか、日朗御諱状とか、波木井殿御書とかあります、是等は疑問があるのであります。正しい學術的研究と云ふことになれば、只今申すこの馬のことを書かれた九月十九日の御書が日蓮聖人の絶筆と稱することになりますのであります。後の波木井殿御書も一般的に用ひられて居りますから、中に一節だけ引いてお話ししますけれども、眞偽未定の御書であります。只今申す波木井殿御報の中に於て、

又粟鹿毛の御馬はあまりをもしろくをほへ候程に、いつまでも失なふまじく候、常陸の湯へひかせ候はんと思ひ候が、もし人にもぞとられ候はん、又其外いたはしくをほへば湯よりかへり候はんほど、上總の藻原殿のもとにあづけをきたてまつるべく候に、しらぬ舍人を付けて候てはをほつかなくをほへ候、まかり歸り候はんまで此とねりをつけをき候はんぞんじ候。(論別道文録二一〇四)

是は波木井殿から借りて乗つてお出でになつた馬のことを仰つしやるので、この馬は大變良い馬で可愛く思ふ、常陸へ行くには道も悪いし、人に盗まれるやうなことがあつても困るから、湯に行つて歸つて来るまで上總の藻原殿は信者であるから預けて置きたい。舍人が違つて馬にひどい扱をされてもいけないから、この舍人を、日蓮が湯から歸つて来るまで貸して置いて貰ひたいと云ふことを云ひ送られた

ので、馬に對する所の同情の厚いことが見えるのであります。

日蓮一期弘法

日朗御讓狀

是は今申した通り眞僞兩方の議論のある御書であります。この中には別に引く所はありません。

波木井殿御書

その次の波木井殿御書であります。之も後から附けたものであると思ひます。日附は十月七日になつて居りますが、日蓮聖人が御臨終の前に斯う云ふものをお書きになつたかどうか疑はしいのであります。併しこの中に名高い文句があります。他にある意味を綜合して作つたやうなものであります。その一節を引きます。

日蓮は日本第一の法華經の行者也、日蓮が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はば、梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にても、日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乗りて通り給ふべし、此法華經は三途の河にては船となり、死出の山にては大自牛車となり、冥途にては燈となり、靈山へ參る橋也、靈山へましまして良の廊にて尋ねさせ給へ、必待ち奉るべく候、但し各々の信心に依るべく候、信心だも弱くばいかに日蓮が弟子檀那と名乗らせ給ふともよも御用ひは候はじ、心に二つ

ましまして信心だに弱く候はば峯の石の谷へ轉び空の雨の大地へ落つると思食せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず、其時日蓮を恨みさせ給ふな返す返へすも各の信心に依るべく候、(繪圖遺文錄二二一四)

洵に懇切な御遺文であります。どうか間違ひなく、『各々の信心に依るべく候』と云はれたこのお言葉を思ひ起して、同じ信心をしようと云つても、信心だに弱くとか、心と二つましましてと云ふやうな、間違つた信心をして居つたのでは、峯の石も谷にころび、空の雨が大地に落つるが如く、法華經を信じて居つたと思ひながら惡道に墮つるやうなことになるから、間違のないやうにしなければならぬ。この間違は、閻魔法王が判決を間違へ、裁判を間違へて起るのでない、自分の信心が嘘であるから起るのであるから、その時になつて日蓮が弟子檀那なりと名乗つた所がよも御用ひにはなるまい、それは贖者ぢや日蓮の檀那と言つても贖信者ぢやと云ふのでお用ひにはならぬ。その場になつてさア大變だと云つて後悔なさつてもそれは取返しが付かぬぞと云ふのであります。同じ信心をするならば贖者でない所に行かなければならぬ。多くの人は指環のやうなものは、贖の指環ではいかぬと云つて、高い金を出して居る指環のやうなものなら何でも宜い、金被せでも鍍金でも拵めて居れば分らない、外して見せて呉れと言つたら外れませぬと言つて居れば宜いではないか。さう云ふ物は本物でなければいかぬと言つて居りながら信心の方は贖せ玉で宜いと思つて居る。人間はその點に於ては實に愚である。指が曲つて居つては人の前に出すに體裁が悪いと云ふので引つ込めて居る。引つ込めて居ればどうもをかしいと云ふことに

なる。引つ込めてもをかしい、出してをかしい。そんな事には心配するが心のねぢけて居ることは一向構はない。人間のあさましいのはそこちやと云はれたが、思へば吾々人間はさう云ふ弱點を持つて居る、結構な信心だと思ひながら悪道に墮ちて居る。それが見えなない爲に覆玉でも構はぬと思つて居る、どんどこ法華や雜炊法華はそれである。どうぞ諸君は、同じ信心をするなれば正しい信心をして貰ひたい。人生には色々な事がある。けれども過ぎ去つて見れば、是も一時彼も一時、人生残る所のものは業一つである。牡丹餅を食つた時に砂糖が足らぬとまづいと思ふ、けれどもいつまでも砂糖が足らなかつたと云ふ事を記憶して居る者は一人も無い、幾度か腹を立てるが時去つて見れば消えて居る。喜んだことも幾度もあるけれども彼も一時是も一時、最後の總決算をする時には皆身體から離れて、唯己れの業そのもののみが残るのである。彼の田中源太郎翁が嵐山の鐵橋から墜ちて千鳥ヶ淵の岩の間に顔を突込んで逆さになつて居つたさうであります。どうか斯うか身體は引揚げたさうであります、それは身體を引揚げたので田中源太郎翁の業は死んだ時に身體を離れてしまつて、千鳥ヶ淵の岩の間にあつたのではない。さう云ふ事はどうでも宜いやうであるけれども、どうでも宜いと云ふ事が一番終いの本當の問題になる。どんとぶつ突かればその時に本當に残るものは、牡丹餅の砂糖が足らぬと言つて喧嘩したやうなことは皆消えてしまふ。唯業のみが形なき羯磨の力となつて己れを引いて行くのである。残るものは形のない魂と形のない羯磨とが結付いて、雪隠へ行かうと云へば行かなければならぬ。さうして

善根が積めばその善根の力が我等を導くのであるから、そこを能く考へて、朝夕信心をするものは、どうしても善根功德の力を一番重いものとして、最後に残るものは悪業と善根のこの二つである。茲に心を籠めて信心をしなければならぬと思ふのであります。

x x x x x

是で御遺文全體を摘要し了つたのであります。續集の方はこの前全部を了りましたから、この御遺文の正集と續集との全體を私が目を通して見た所で、先づ大事だと思つた所は大體是で御紹介したのであります。(畢)

郷一郷知るならば、半郷は父の爲、半郷は妻子眷屬を養ふべし、我命は事出できたらば上にまゐらせ候べしと偏に思ひきりて、何事につけても言を和らげ、法華經の信心をうすくなさん様たばかりる人出来せば、我信心をこゝろみるかとおぼして各是を御教訓あるはうれしき事なり。

— 日蓮聖人上野抄 —

日本人に還れ

——いろは歌と教育勅語——

貴族院議員 男爵 井上 清純

一四

『いろは歌』と日本人の人生観と云ふことに付て冒頭にお話して見たいと思ひます。『いろは歌』と云ふのは今日その影が薄らいで居りまして、小學校あたりでも唯文字の符牒だと考へて居るのでありますが、これは恐らく明治初年の排佛毀釋の影響からであらうかと思ひます。併し『いろは歌』の中には日本人の大切な人生観が織込んであるのでありまして、八柱一字の人生観とも云ふべきものを、小さい内から子供の頭に植付けると云ふことに努めた吾々の祖先是洵に偉かつたと思ひます。

大和の法隆寺の金堂に御参りになつた方は、推古天皇様の御遺愛の玉蟲の厨子と云ふのを御覧になつたらうと思ひます。其の厨子の須彌坐の四面に佛畫が、密陀僧と云ふ油繪具で描かれて居ります。この油繪は日本の方が早いのでありまして、これが恐らくは世界最古の油繪と思ひます。その模型が上野の博物館の表慶館にありますから、お序での折は御覧になつたら宜からうと思ひます。西洋にもまだ油繪が發達して居らなかつた時代に於て、雪山童子の本生譚と云ふものが、油繪で以て描かれて居るのであります。この雪山童子と云ふのは、佛道修行者でありまして、その頃印度の哲學者は多く、山中で修行をして居つたのであります。雪山童子もヒマラヤ山中で善知識を求めて修行を

して居る間に、美妙なる聲で一つの歌が傳はつて來たのであります。それは『諸行無常、是生滅法』(諸行は無常なり、是れ生滅の法)と云ふのであります。これは解つたが、次の句が解らない。誰が何處で歌つて居るのか判らないので、色々探して居りますと、釋利と云ふ小鬼が其の歌手であることが分りました。そこで釋利に對してその次の句を聞いたのであります。釋利は、自分は腹が空いて居るから人の肉を食はなければ次の句を歌ふことが出来ないと申しました。雪山童子はそれが爲に人を殺すと云ふことは固より出来ませぬから、自分の身體を捧げるからと言つて次の偈を聞くことになつたのであります。これは、法華經に説かれた『我不愛身命、但惜無上道』(我は身命を愛せず、但だ無上道を惜しむ)と云ふことを、物語として現はしたものであります。そこに於て釋利は、お前の肉を呉れると云ふならば、聽かしてやらうと云ふ固い約束の下に、次の『生滅滅已、寂滅爲樂』(生滅滅し已つて、寂滅を樂と爲す)と云ふ句を教へて呉れたのであります。そこで童子は大變喜びましたが、この歌を今死んで行く自分が獨り知つて居ても惜しいので、その附近の石や木片に書留めてから、約束通りに身を躍らして釋利の口中に投じたのであります。その姿が今の玉蟲の厨子の面に描かれて居るのであります。ところが釋利は忽ち帝釋天に姿を變じまして、これを救つたと云ふ、涅槃經の中にある有名な物語であります。『諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂』と云ふこの十六文字の偈は、大乘佛敎の眞髓を傳へたものでありまして、平安朝時代にこの偈の意味を採つて『いろは歌』が作られたのであります。弘法大師の作だと云ふことになつて居りますけれども、そこはつきり致して居りませぬ。

この『いろは歌』は、頗る整つたところの、人生観を教へたものでありまして、現代の思想の動搖も、根柢はこの人生観の不徹底から來ることを考へた時に、古人が『いろは歌』を以て文字の基調としたことは、A・B・C・Dの如き單なる符牒とはその選を異にし、洵に意味深長なるものがあることが窺はれると思ひます。日本文明にはそこに貴いところがありまして、古今に通じて變らない大眞理を抑へて居ります。これに反して西洋の主張は、洵に上滑りの

ことを唱へて居るやうに思はれます。それ故に變化常なき有様でありまして、倫理でも進化の半面の『用道』即ち運用の方面しか知らない。倫理の根柢に於ける『體道』の不變、即ち『之ヲ古今ニ通シテ譯ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と云ふ道德の大本を知ることが出来ない。時、處、位に依つて變化する側だけを以て道德の全部と思つて居る。こゝに西洋文明は道義的墮落に陥つて居ります。一切のものには、體と用との二面性がありまして、人間の心に致しましても、變りない心の本質と、時、處、位に依つて變化常なきところの心象との二面性があります。丁度海の水と表面の波のやうな両面があるのであります。然るにその動いて行く方だけが心であつて、變らないところの不變の方面は知らぬと云ふことになりまして、そこで刹那生活と云ふやうなことが起つて来る。現代の生活は皆刹那生活でありまして、『ころ／＼と心に迷ふ心こそ……』と云ふ歌があります。心には本當の心と、その本當の心を迷はす心との二つがあるのであります。そこで心には二つあると云ふことを常に自分で考へて見て、成程今誘惑に打克つ心と、誘惑を仕掛ける心とが戦つて居るなと云ふことを感づかなければならない。

世の中には悪魔と云ふものが存在して居ります。即ち正しい事や、善い事を妨害する一切の有形、無形のものはこのを稱して魔と云ふのであります。『魔』と云ふ字は、後から作つた字であります。印度の發音であります。その魔の存在を知らなかつたならば色々の不事が次から次へと起つて来る。これは非常に恐ろしいものであると云ふことを考へて、常に用心しなければならぬのであります。少し疎があつたならば、必ず魔軍がやつて来る。家の中に少し疎があるならば必ず病と云ふ魔がやつて来るのであります。往來を歩いて居つても少し不用心であるならば、電車に轢かれるとか、自動車で怪我をすると云ふことが起るのであります。この『用心』と云ふことは華嚴經の言葉であります。普通は火の用心とか云つて軽く用ひて居る言葉であるけれども、實は『實相を見る』と云ふことであります。例へばこゝに石橋が架つて居ると云ふならば、成程このやうな石の橋ならば堅固である。人も亦この石の橋のや

うなものを渡つて行かなければならぬ。それ故に教と云ふものを選択しなければならぬと云ふ氣持の起ることが用心と云ふことであります。眼に觸れるもの、耳に觸れるもの悉く用心の種ならざるものはないのであります。それ故にお経文は紙に書いてあるものだけでなく、森羅萬象悉く經文となる譯であります。夜寝る時分でも、今安らかに布団の中に眠れるが、併し跽傍に彷徨うて今夜宿る處のない人もあらう、或は病に冒されて眠ることの出来ない者もあらう、どうか多くの人々が安らかに眠に就くことが出来るやうにと、掌を合せて多くの人を慈念して眠に就く、それが用心であると云ふやうに説いてあります。

然るに不變の心と云ふものは知らぬと云ふことになりまして、そこで刹那生活と云ふことが起つて来るのであります。これを眞面目に眞理だと思つて居る者もあります。日本の傳統的な良風美俗を破壊して、新しい村など云うて新社會を建設しようとするのも、或は共同生活と稱して夫婦の制度を破壊しようとする思想も、皆物事の變化の側だけを見て、不變の側を忘れるからさう云ふ間違ひを仕出かすのであります。所謂舊い、新しい、保守だ、進歩だ右だ、左だと云ふのも、總ては物事の両面を知らぬところから来るものであります。日本文化の長所は、不變の上に變化のある所を見て行くやうになつて居ります。それ故に人生觀の根柢にも一貫する大本を抑へようとして居りません。道德に付ても社會に付ても、國家に付ても皆さうであります。それ故に夫婦の歪をする時にも、既に死の覺悟をして行くと云ふことであります。先年日本に來た獨逸のフランク博士が、日本の婦人道德を映畫に取入れんとして非常に苦勞したのであります。あの『新しき土』と云ふ映畫の中に、日本の婦人道德を織込んで居るのであります。日本の婦人は如何に結婚を神聖視して居るか、實に驚くべきものがあると云ふことを感致致しまして、これをその映畫の中に織込んで居るのであります。孔子も『婦を夫婦に發して、峻として天を極む』と申して居ります通り、一切の人類の道德は夫婦の關係から發して居るのであります。男女の道德の類は直ちに人類文化の崩壊であります。それ

故に婦人の道徳と云ふものが一番大切であります。若もこれが破れたならば人倫は廢類し、文化は破壊され、國家も滅亡するのであります。今や英米佛蘭西の滅びかゝつて居る源頭はそこにあるのであります。これを見ましても將來人類を救ふものは日本文明であると云ふことが判ります。早晚日本に全世界の留學生が集つて来る時が来るでありませう。さうして人類の文明は斯の如く建造さなければならぬと云ふ指導原理を我國から教はることになるでありませう。日本民族は、滿洲に於て、支那に於て、その模範を示さなければなりません。若しも大陸に進出せる人達がさう云ふ自覺がなくて、唯彼の國で享樂を貪り、私利を漁り、不正のことをやるならば、天罰立ち所に下つて日本は太平洋の波の下に覆没してしまひます。日本に於ては夫婦の歪をする時に既に死の覺悟をする。それ程一貫した思想に日本人と云ふものは立つて居るのであります。「先王の道を行ふて過つ者は未だ曾て之れ有ざるなり」で、古今變らぬ眞實を抑へた者には、保守も、進歩も、左右もない。日々に新にして、而も萬古變らぬものがあります。その急所を抑へた所に日本文化の特長があるのであります。

この『いろは歌』は、

色は香へど散りぬるを

我が世誰ぞ常ならむ

有爲の奥山今日越えて

淺き夢みし酔ひもせず、

京。

と云ふのであります。「我が世誰ぞ常ならむ」までが前段でありまして、「諸行は無常なり、是れ生滅の法」と云ふ人生の儚い有様を示し、「有爲の奥山」から下は即ち「生滅滅し已つて寂滅を樂となす」と云ふ、修道に依り人生觀の

確立することを教へ、お終ひの『京』の一字は、現在に於ては歡喜法悅の生活、死後は神となり、佛となつて行くこと云ふところの、この世には歡喜の花開き、死して成佛の木の實を結ぶと云ふことを京の都に譬へたのであります。「いろは歌」はこの三段に分れて居りますが、最初の『色は香へど』と云ふ句は、人生の醒めざる生活はどのやうに榮えて居つても生者必滅と申しまして、必ずこれは滅びて行くものだ。「色」と云ふことは眼と鼻と耳の三つが關係して居る。「色」の裏は心であります。「色は香へど」と申したのは、眼と鼻との關係で言うたのであります。人生の快樂に酔うて居るところが色は香ふと云ふことであります。それは直ぐ散つて行くのであります。人生そのものも『我が世 誰ぞ常ならむ』で、一人として永遠に生き残る者はありません。その死の襲うて來ると云ふことも無常迅速と申しまして、何時來るか分らない。それ故に古人も

後の世と聞けば遠きに似たれども 知らずや今日もその日なるらん

と詠んで居ります。古來の聖賢偉人ほど左様に人生の儚いことを常に看破して居ります。平凡人ほど人生に酔うて居ります。それ故に生死無常と云ふことを忘れてしまふのであります。現代の文明は死ぬと云ふことを忘れて居る文明であります。生存權を主張し、パンを興へよと騒いでも、死の問題は忘れて居ります。「死んで了へばそれつきりではないか」と、死と云ふことを實に粗末に考へて居ります。今日の識者の中にも、この大切な問題を殊更に回避し、只管肉體の榮養を求めて、一日の生を食らんとする者がある。古今の聖者、哲人と云はれた人は必ず死の問題を捉へて居る。孔子も『朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり』と云ひ、或は『生を捨て、義を取るものなり』と云ひ、或は佛教に於ても『我不愛身命、但惜無上道』と申して居ります。現世に酔うて居る人には『色は香へど』と云ふところだけで、『散りぬるを』と云ふところは判らない。「我が世誰ぞ常ならむ」など申したならば逃げ出して

しまふだらう。「いろは」の二行とは行けないのが今の有様であります。有爲の奥山にでも行つたならば、山の裾をグル／＼廻つて居るのみで、一步でも登らうとしないのが彼等の生活である。これを小我の生活と申して居ります。

そこでこゝに人生觀を打立て、有爲の奥山を今日越えようと云ふことになつて来る。「有爲」と申すのは遷り變つて行く儚い人生を示し、その有爲轉變の迷ひの人生を高い山に譬へ、その山を越えるにしましても明日とは待たない。況してや死んだ後ではない。即今只今、發心と同時に越えることを「今日越えて」と申すので、この勇猛精進が日本精神の特色である。「善は急げ」と申して居ります。現在生活が大切である。現在生活が完全に行きさへすれば、死後は必ず光があります。さうして「浅き夢みし酔ひもせず」で、人生に於て酔ひかけて居つたけれども、深く陥らない。「遷滅無常は昨日の夢、菩提の覺悟は今日の現なるべし」で、その夢が醒めて、無始無終の我と云ふ大我が解り、現在に於ては信仰法悦の生活が開かれ、死後に永遠の榮光に就いて行く、本當の人生を見透したところの精神生活に入つて行くから、そこで「京」の都に達することが出来ると云ふ、人生に觀歌を擧ぐると云ふ意味に於て、「京」の字は輝いて居るのであります。今日は立身出世と云ふことを申しますが、金持になるとか、大臣、大將になるとか云ふことが立身出世に非ずして、この有爲の奥山を越えた人が立身出世をした人であります。斯う云ふやうに人生觀を變へなければいけない。今までの學問の目的を變へてしまはなければいけないのであります。不生不滅の我である。我は無限の生命を持つて居る。智慧もあり、慈悲もあり、廣大無邊の働きが出来ると云ふ妙體である。こゝに自慶安住と云ふところに達する。斯る妙體であると云ふことを本當に考へた時が、有爲の奥山を越えた時であります。

「諸行無常」と云ふのは萬物流轉と同じ思想でありまして、今日世界の思潮と云ふものは萬有流轉であります。英吉利人、亞米利加人、佛蘭西の人、悉く斯う云ふ人生觀を持つて居るのであります。少しも彼等は常住と云ふことを見出すことが出来ない。さうして刹那生活を遂つて居るのでありますから、昨日まで大英帝國と威張つたものも、明日のいのちが判らぬ。昨日は歐洲の一番の文明國だと自惚れて居つたところの佛蘭西は、何時の間にか地圖の上から消えてしまふかも知れない。萬有流轉であるから仕方がないと云ふのであります。山でも、川でも、人間でも、形あるものは總て壞れて行く。是れ生滅の法で、儚いところのものである。法華經に「衆生劫盡きて大火に燒かると見る時」と云ふのは、この世界が幾億萬年の後に燒けて星雲になる時であります。非常に遠いことまで言つて居るのであります。而も「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり」と申して居ります。この「我此土安穩、天人常に充滿」と云ふのは法華經の有名な文句でありまして、「我が此の土」とある。唯ばんやりと天とか宇宙とか申さない。又十萬億土の淨土とも申さない。その遷り變つて行く、その奥に不滅の我、實在の世界と云ふものを認識した時に、即ち「生滅滅し已つた」時に、眞の安心と、幸福がそこにあるのである。斯る立派な精神を拓いて行くのを「寂滅を樂と爲す」と云ふのであります。常ならざるものを常と考へ、樂ならざるものを樂と考へ、我ならざるを我と考へ、淨からざるものを淨しと考へると云ふことの誤謬を是正して、眞の「常樂我淨」を求めなければならぬ。どうも「いろは歌」は非常に難かしい意味を含んで居ります。

三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや。

と日蓮上人の言はれたあの不滅の世界、久遠の昔から盡未來際に至るまで常住不滅であるところの實在であり、眞理であるところの世界、これを吾々の祖先は高天原と申したのであります。この高天原を持つて來て現實の世界にその影を寫して來たならば、そこに日本國家の安泰と、無窮に彌榮える根柢が立つ譯であります。本地垂迹とは、斯る意味を持つものであります。印度が本で日本が迹だなどと云ふのではないのであります。一つの理想世界を築き上げて、その影が映つたものが日本である。これは非常に深遠なる思想でありまして、「いろは歌」は獨り個人の完成を

歌つたものではない。「いろは歌」はどうしても法華經の思想を以て、改めて見直さなければならぬのであります。個人の完成を歌つたものではありませぬ。大楠公が七生報國を誓はれた如く、自分だけが成佛を欲しない。日本國民と共に成佛しなければ、自分獨りだけの成佛を欲しないと云ふ精神が楠公の七生報國であつた。國人を擧げての完成であり、國土成佛、實土實現を意味し、鑒て全世界を天の沼矛を以て修理固成せんとする日本精神の光揚であるのであります。

「いろは歌」は斯の如き大きな理想を持つて居るのであります。

明治天皇の御製に

しのびてもあるべき時にともすれば あやまつものは心なりけり

ふきまよふ風にまぎれて東とも 西ともわかぬかねのおとかな

近頃は東京でも、地方でも鐘の音が聞えて来ない。何を遠慮して梵鐘を打たないのであるか。甚だしいのは鐘を外して獻納するやうな間違つた寺があるのであります。今全日本國民は非常に迷つて居るのでありますから、迷つた人の耳に鐘の音を聞かして下さらなければならぬ。獨逸は戰勝がある毎に寺の鐘を鳴らして居ります。こゝに獨逸精神の深い意味合があるのであります。唯勝つたから萬歳を唱へて、盃を擧げると云ふやうなことではいけない。鐘を叩いて冥福を祈禱しなければいけない。御製に

しづかなる心のおくにこえぬべき 千年の山ありとこそきけ

とあります。この「しづかなる心のおくにこえぬべき千年の山」と云ふは、有爲の奥山を指されて居るのであります。心の奥にある大きな山を越えなければならぬと仰せになつて居るのであります。佛教徒が時代に誤つて、何でも皇道といふやうなことを言はなければ佛教は立たぬやうなことを考へて居る者もある。佛教は佛教として立てば宜しいのであります。佛教徒が踏み間違ひをしては大變であります。「佛法必ず東土日本より出づ可し」日蓮教學の任は大きいのであります。どうしても我々は「我、我所」と云ふものを取らなければならぬ。この「我」と云ふのは小我を指して「我」と云ふのであります。それから「我所」と云ふのは「我の所有」と云ふことであつて、小我を指して我と思ふその考を取除かなければならない。何でも自分のものであると云つて、ものに嗜り付くといふ考を取つてしまはなければいけない。人の物までも取つて自分の所有にすると云ふやうな考があれば、滅私奉公と云ふ氣分はどうしても出て来ない。日本人ぐらゐ今日は「我我所」に囚はれて居る國民はないと云つても宜い位であります。それ故に幾ら法律を出しても法網をくぐるものが種える一方となります。佛蘭西の今度發布された憲法は、法三章と申しますが、本當の三條しかない。三條で澤山であります。

華嚴經に「信は法藏の第一寶」——法藏と云ふのは精神の藏、その第一の寶と云ふのであります。「信は道の元、功德の母なり」とあります。道德の元である。一切の功德が出て来る母である。信仰は精神の藏の中に於て第一の寶である。道德の元である。一切の功德が出て来る母胎であると申されて居ります。法藏と云ふのは物質の藏ではありません。今日は金が足りないとか、銀が足らぬとか云つて居りますが、さう云ふ物質の藏ではない。教育勅語に「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」とありまして、この肇國の精神と云ふものが一切日本の原動力であると云ふことを御教へになつて居ります。これが日本の寶なのであります。唯巨萬の財寶を積み上げて、それで世界に號令せんとしても、世界は愚か、一國と雖も決して承服するものではありません。

今や亞米利加合衆國は、世界中の金の八割以上を持つて居ります。而もこの金貨は一個師團と、飛行聯隊を以て防衛せなければならぬやうな厄介なものになつて居ります。獨逸、伊太利側が勝つてしまへば、米國が溜め込んで居る所のこの百八十億の金貨は無價値になつてしまふかも知れません。これは非常な事でありませぬ。これを無價値にしない爲に米國は參戰するかも知れませぬ。併しながら今となつては既に遅い。米國が參戰しましても勝味は到底ありませぬ。遂には全世界の金貨本位はなくなるものと考へなければならぬ。物質と云ふものは新様に頼りないものがあります。これが亞米利加の大きな悩みであります。最早大きな廣言は吐けないことになりました。それは國に力が無いのであります。今獨逸、伊太利は、南米を合衆國から切離す運動をして居るらしいのであります。益々合衆國は孤立無援の境に陥つてしまふ。日本は如何に世界の變局に對應せんとするか。勅語に於て「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せになつて居りますことを深く考へて戴きたい。人類の永遠の幸福は金を積むことではありませぬ。徳を積むことでなければならぬ。これを 神武天皇様は「積慶、重暉、養正」と仰せになつたのであります。日本の皇室には物質的の實は何にもない。唯徳の實だけを御持ちになつて居るのであります。「我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心を一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華」と仰せになつて居ります。これが世界に冠たる御國體そのものであります。普通我國は萬世一系の天皇國であると云ふことを言ひまして、それが國體であると申しますが、さういふ形の上だけのものではない。君は臣下を視ること子の如く、弟子の如く、慈愛惠撫せられ臣下は君を奉すること師匠の如く親の如く、敬愛尊重しこの上下の感應道交するところに國體の精華があると仰せられて居ります。この精神が眞の國體であります。形だけのものではない。それ故に徳川時代に於きましてこの精神が滅んで居たから、明治天皇様は「且つは我が國體に戻り且つは我が祖崇の御制に背き奉り淺ましき次第なりき」と仰せになつて居ります。今は理論的に國體を説明する人がありますが、佛敎も國體も決して冷やかなる研究室から出て多

るものではありませぬ。君に對するところの熱烈なる渴仰心からのみ湧出し來るのであります。

・この御勅語を今日教育勅語と申して居りますけれども、もと／＼教育勅語と名前を付けられた譯ではないのであります。「教育の淵源」とありますので後で文部省がさう申しただけであります。寧ろ臣民道に關する勅語と申上げた方が適當だらうと思ひます。この勅語をお下しになつて今年は丁度五十年になります。昨年が實は五十年に當るのでありますが、延びて今年五十年の記念式典が行はれると云ふ話であります。この勅語は所謂東亞生命園建設に於て最も大事な指導精神となるのであります。臣民道に關する勅語と解する方が適當だらうと思ふのであります。それはどう云ふ譯かと云ふと、明治二十二年明治天皇様は欽定憲法を御發布になりましたが、その第二章に「臣民の權利義務」とありまして、日本臣民道が十分に表はれて居りませぬことが、その翌年の二十三年十月三十日勅語渙發となつた一つの重大なる意義であらうと拜察致します。それ故に憲法とこの勅語とは不可分の關係にあるのであります。この勅語の渙發に際しましては、二十二年に憲法が發布されたのでありますから、二十三年に更に勅語を渙發されることはどうかと侍臣の方さへも左様に考へて居たさうであります。勅語の原文を主に草案致した井上毅子も新様に考へて居つたと云ふことでもあります。併しながら 明治天皇様には別に御考があつたと見えまして、勅語の起草を命ぜられたのであります。熟々この由來を拜しますのに、 明治天皇様には容易にこの勅語を御裁可にならなかつたのであります。一日元田侍講を召されて「この案では未だ完全だとは思はれない汝の考はどうか前後首尾は差支へないが、中間徳目を掲げてある條に於て再考の餘地があらう熟慮して奏聞せよ」と仰せがありました。徳目の條項がどう直しましても御氣に召さなかつたのであります。遂に「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と云ふ一句が入りまして、初めて御嘉納になつたのでありますから、天皇の大御心はこの句に盡きて居るかと思はれます。即ち「天壤無窮の皇運を扶翼」することが臣下の道であります。この大きな道が殘念ながら憲法には十分に明にされて居

らなかつたことを、明治天皇様には深く御心配あらせられた御様子であります。それ故にこの勅語をその翌年に演發されたと拜察するのであります。

抑々御家勅の淵源は申すまでもなく御神勅に發して居りまして、
 豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ我が子孫の王す地なり、宜しく爾、皇孫就いて焉にしろしめせ、行矣、實
 祚の隆えまさんこと、當に天壤と共に窮り無き者なり。

この天壤無窮の御神勅に基いたものであることは明なることであります。併しながら當時起草委員の方々は、この御神勅も、推古天皇の欽定憲法も見て居らなかつたらしいのであります。さう云ふ時代であるから別に責めることは出来ませぬけれども、どう考へて見ても御覽になつたやうには見えないのであります。

勅語の冒頭に、『國ヲ肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ』と仰せになりまして、天壤無窮の皇運扶翼の大業を、臣下を率ゐて神明に誓はれたのであります。御承知のやうに『我カ臣民父母ニ孝ニ』といふ所から『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ』と云ふやうに、平戰兩時に亘る徳目を列擧せられました。『我カ臣民父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭敬己ヲ持シ、博愛衆ニ及ホシ、學ヲ修メ、業ヲ習ヒ、以テ智能ヲ啓發シ、徳器ヲ成就シ、進テ公益ヲ廣メ、世務ヲ開キ、常ニ國憲ヲ重シ、國法ニ遵ヒ、一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ』と十五の徳目が擧つて居るのであります。その宇宙的、世界的、家庭的、社會的、人道的及び人格的各方面に對する道徳を明示せられました。『以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ』と仰せられて居るのであります。これに依りまして聖勅の御主旨が諒解が出來得ると思ひます。十五の徳目は臣民道即ち忠の内容でありまして、一切の徳目は『皇運扶翼』に綜合歸一せられることに依つて、その光輝を倍するのであります。諸々の徳目を修めることを致しませぬければ、臣民道の完璧を期すると云ふことは出来ませぬ。又皇運扶翼の道が完全に行はれませぬば、一切の徳目は無意義となるのであり

ます。丁度一切經の中に於ける法華經如來壽量品のやうなものであります。『親に孝ならんと欲する者は須く君に忠なるべし』忠なき孝は我國には絶對に存在しない。それ故に幸徳秋水は親孝行であつたさうでありますけれども、忠なき孝行は我國に絶對に存在しないのでありますから、幸徳秋水の親連は無間地獄に落ちて、四苦八苦の苦しみを受けて居ることは間違ひないのであります。それ故に幸徳秋水は非常な親不孝をして居る譯であります。

昔徳川時代にも忠義と云ふことがありますが、併し 天皇に對する忠義は、徳川時代の忠義とその深さと廣さを異にするのであります。即ち臣民道の内容は忠義と云ふことであり、忠の意義は皇運扶翼と云ふことを明に遊ばされたものと拜察するのであります。徳川時代の忠は主として扶持者に對する報恩であります。扶持を貰つた方に忠義を盡すのであります。だから一般の庶民は藩主に對し忠義の觀念は薄かつた。さうして大名は將軍に、藩士は大名に忠義を盡すのであります。藩士が大名や將軍を飛越えて 天皇様に勤王をすることは國法が禁じて居るのであります。又大名が將軍を飛越えて 天皇に直接に忠義を盡すことはならぬことになつて居るのであります。斯くしなければ徳川幕府は成立ちませぬから、さう云ふやうにしてしまつたのであります。源賴朝が幕府を建てた後に段々にそれが具體化されて、徳川幕府に於ては全くそれが制度化され、傳統化され、道徳化されてしまつて居つたのであります。それ故に熊澤蕃山と云ふやうな人の書いた物を読みましても、楠公不起論と云ふことを言つて居りまして、徳川時代に於ては楠公は君の御召があつても起つことは出來ない。又起つてはならないと云ふことを書いて居りますのは、さう云ふ思想が流れて居つたからであります。今日徳川時代の思想を一洗しなれば、本當の日本精神は戻つて來ないのであります。徳川時代に山縣太華と云ふ長州の儒者が書いた本があります。試みに朝廷から將軍に問はん。『汝が持つところの天下の領土、人民は誰から一體貰つたのか』將軍答へて曰く『臣の祖先家康が關ヶ原の戦ひに於て勝つて、將軍となつたから、當然天下の國土と人民とはその手に歸したのである。豊臣から貰つたものでもなければ

ば、況や 皇室から頂戴したのではない、將軍であるから自然にその手に歸したものである。『然らば問はん。その將軍の祖先であるところの源頼朝は誰から戴いたものであるか』 『それは源頼朝を地下に起して御聞き下さいますやうに、臣の答ふるところではない』と申して居る。強者に天下が歸するといふのが徳川時代の時代思想、世界觀であつたのであります。この世界觀に於て永く養成された者の子孫でありますから、吾々の心の奥底に何處かさう云ふ世界觀が残つて居る。少しでも残つて居るならば日蓮上人の立正安國論は解らない。これを一齊に除いてしまはなければ、眞の立正と云ふ意味は解つて來ない。それを勅語に於ては、皇運を扶翼すると云ふことを忠義の内容としなければならぬと云ふことを仰せになつて居るのであります。

而して『是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ナル臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン』と仰せられて居るのであります。立派なるところの臣民であると同時に、祖先に對する申孝であり、第一の供養であると仰せられて居るのであります。祖先に對して何が孝であるかと云へば、その子孫が皇運を扶翼し奉り祖先の遺風を顯彰することであればならぬ、之を祖先が一番喜ぶ譯であります。祖先を喜ぶことが祖先に對するところの孝養であり、第一の供養でなければならぬと仰せになつて居るのであります。忠孝と云ふものが一本となる譯であります。『朕が忠良なる臣民』と云ふ御言葉は、日本の國籍を有するところの老若男女、賢人も愚人も、富める人、貧しい人悉くを指されて居るのであります。天壤無窮の皇運を扶翼する天職を有する日本國民の正當の稱名でありまして『忠良なる臣民』と云ふのが吾々の本統の名前であります。古來 皇室に於かれましても『大御實』『天の益人』と仰せになつて居りまして、海に有難い御言葉であります。どんな罪人でも、又愚かなる者でも、貧しい者でも、立ん坊のやうな者でも『大御實』『天の益人』と仰せになつて居るのであります。少しも區別はないのであります。日本國民はここに覺醒致しまして、眞の日本人とならなければならぬと思ひます。

斯して皇運扶翼ほど臣民に取りまして大きな權利はないのであります。それと同時に又これ程大きな義務はないのであります。憲法の『臣民の權利義務』と云ふことは、個人の權利義務ばかりでなくして、皇運を扶翼すると云ふ大きな權利と、大きな義務を持つものであると云ふことに、憲法の解釋を改めなければならぬ。改めた時に、日本の民法も、商法も、刑法も悉く日本的の法律觀念となる譯であります。斯の如くして日本の罪人は半減されると思ひます。刑務所は半分になると思ひます。一切のつまらない裁判は、汝皇運を扶翼する所の大御實が、親子の争ひをしてどうするのか、主人の物を奪ひ取つてどうするのかと、一言の下に裁くことが出來ると思ひます。ところが近頃の學問を學んだ人の中には、或は忠孝の道を一國一家の小さい道徳のやうに考へ遠ひを致して居る者もあるかも知れませぬ、これは學生ばかりではない、大學の先生方が皆さう云ふ考を持つて居るのであります。教育勅語は最早舊い教へとなつて、現代進歩した人間を教育することが出來ないやうになつて居る。再び新なる指導精神が出て來なければならぬと云ふことを申して居るやうな者もありますが、それは非常な間違ひだと思ひます。我が 皇室に於かれては、世界に眞の平和をもち來たし、人類の上に理想文明を打樹てると云ふ、即ち全人類を救ふと云ふ天業恢弘、天下光宅の大天職があるのでありますから、皇運扶翼と云ふことは、實に日本の道でありますと同時に、世界道であります。これを『斯の道』と仰せられ、而も『斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所』と宣はせられて居るのであります。こゝに子孫とございますのは、畏れながら 天皇御自身並に御子孫を指されて居りまして、『斯の道』と云ふのは單り 臣民道ばかりでなく、畏くも 天皇道を御示し遊ばれたものであります。『之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス』と仰せられて居るのであります。日本道は直ちに世界道であるからであります。日本は斯の如き大きな理想を持つて居るところの正義の國であります。斯して初めて東亞の安定、否世界を指導するところの神國であると云ふべきであります。聖勅は『朕爾臣民ト俱ニ奉々服膺シテ咸其德ヲ一ニセ

「シコトヲ庶幾フ」と結ばれて居るのであります。この「威」の中心に畏れながら、天皇御自身がましますのであります。天皇は臣民と俱に拳々服膺して、天業恢弘の道に精進せんとする御誓願であり、臣民に對する御願望であります。日本臣民たらんもの誰か感奮興起せざらん。こゝに皇運扶翼の精神が現れて来る次第であります。亞米利加の曩のルーズベルト大統領は、これを英譯しまして全國の小學校に教科書として居る譯であります。朝鮮に持つて行かうとも、滿洲に持つて行かうとも、或は支那大陸に持つて行かうとも、この儘で差支へない。それを向ふで色心配するやうな人があるならば、その思想が伸びないからであります。勅語には缺陷はないのであります。而もこれは宗教と密接なる關係がありまして、遂に清明なる佛教と相連絡することに於て、益々勅語の意味合が伸びる譯であります。

神武天皇は高千穂の宮に御前會議を御開きになつた時に、「何れの地にまさば天の下の政を平けく聞しめさむ」と仰せられました。この御精神は「天の下を安國と平けくしろしめせ」との御神勅に基いて居るのであります。葦原の中つ國に「和ぎ平ぎまつらふ國」を實現し給ふにあつたのであります。この「しろしめす」と云ふ御言葉は外國にはないのであります。言葉もなければ、事實もないのであります。「しろしめす」と云ふのは日本政道の原理を示した言葉で、恰も母親がその子を保護し育てると云ふ意味でありまして、古來支配とか、私有とか、領有と云ふ意味を持つ「うしはく」と云ふ言葉と區別されて居るのであります。外國の大統領なり皇帝なりは「うしはく」であります。日本、天皇はしろしめされるのであります。日本政道の原理を、しろしめすと云ふことに變へなければ、本當の、天皇政治は出て參らないのであります。それには大學の根本を改めなければいけない。「しろしめす」と云ふことは、天の恵の下に「四時行り、萬物生る」で、春夏秋冬が規則正しく循環して、萬物が生育する。大きな木も、小さな草も皆その天分を全うする如く、天皇の御恩光は一視同仁、貴賤貧富、老若男女悉くその所を得せしめ、君は君

たり、臣は臣たり、親は親たり、子は子たり、皆その序を保ち、天賦を全うすることを「しろしめす」と云ふのであります。こゝが共產主義と格段な相異がある所でありまして、一視同仁でありますけれども、大きな木と小さな草が生ずるやうに、現はれた現象には差別が起ることは已むを得ないのであります。その現象までも平等にするとは云ふことは間違ひであつて、共產主義の根柢にこの大きな過誤があるのであります。序を保つことが大事であります。

最近亡くなつたところの獨逸の世界的建築學者ブルーノ・タウトと云ふ人の書きました「日本美術の再發見」と云ふ本の中に斯う云ふことが書いてあります。日光の東照宮の建築は成るほど立派な藝術であるけれども、專制政治家が藝術家を動員して強制的にこれを造らせて出来上つたのが東照宮である。即ちこれを「專制者の藝術」と名づけ、「こゝには伊勢神宮に見る如き純粹なる構造學もなければ、最高度の明澄さもない」云々と申して居るのであります。彼は東照宮と時を同じうして小堀遠州政一に依つて造られた京都の桂の離宮を鑑賞して曰く、「日光に於ては所謂世界の名建築と稱せられるものと同じやうに、その効果はかゝつて部分の總計にあるのである。(西洋の文明は部分の總計であります。日本の文明は綜合體である。)謂はば二十萬の軍隊は二萬の軍隊よりも多數であると云ふ如くである。然るに桂の離宮にあつては如何なる要素も、一木一石と雖もこゝに皆生命、自由な個性を持たないものはない。それは恰も何人も強制を蒙ることなく、(今日の統制經濟の如く)各人がその本性の儘に行藏して而も調和を保つやうな良い社會の成員の如くである。洵に桂離宮はバルテノンに於けるよりも、ゴチツクの大伽藍に於けるよりも、こゝでは遙かに著しく「永遠の美」が開顯せられて居る」と申して讚歎措かなかつたのであります。この良き社會こそ即ち「しろしめす」世界でありまして、日本國體が最高文化を生み出す所の根源的生命であると申すのであります。

今や世界を日本が背負つて指導しなければならぬ時が來たのであります。日本の國民が一體になつて、この指導精神を以て全世界を指導しなければならぬ時が來たのであります。任重く道遠きものがあります。ヒツトラー總統

が嘗て日本の要人に語つて曰く「自分は下賤の出であるが故に、獨逸民族の統一和合は如何に苦心慘澹しても難しい。(今日尙ほ獨逸國民の中にヒットラーに服してない者もあるのであります) それを考へると日本の國體は洵に美しい。獨逸には國體はない。私は日本の國體を十分に知つて居る。三千年の年數を経なければ日本の國體を持て來ることは出来ない。そこで已むを得ず變則的なことをやつて居るけれども、内心の惱みを察して呉れ」と言つた。又先年秩父宮様が御出でになりました時に、ニールンベルヒに於てナチスの大會が開催されたのであります。その時にヒットラー總統は單身御出迎申上げまして、恰も侍從式官のやうな態度を以て何と申上げましたか。「世界第一の高貴の方をニールンベルヒと云ふやうな僻陬の地に御迎へ申上げたことは、ヒットラーを初め獨逸民族永遠の光榮である」と二回この言葉を繰返して厚く御禮を申上げたのであります。世界第一の高貴の方と申上げて居るのであります。如何に日本の國體を讚美して居るか。

考へて見ると、この前の第一次世界大戰に於ては、獨逸は驚くべき賠償金、一千四百億マルクの賠償金を課せられ、海外の領土は全部取上げられ、國內の鐵の産地も全部取上げられ、空中から空襲でも採らなければ何にもないと云ふ獨逸になつてしまつたのであります。當時の獨逸國民の道徳は廢頽し、實に慘澹たる社會情勢に陥つた時に、ヒットラーは同志七人と立上つた。さうして何と呼びかけたか、「この儘で居たならば獨逸民族は地獄の底に沈んでしまふ。速く日本を眺めよ。日本は七十年前にはその存在すら認められなかつた。その日本が七十年の間に驚くべき躍進をして、今日歐羅巴の一等國を眼下に見るやうな強大國になつてしまつた。而も日本は獨逸同様、鐵礦が豊富に出ると云ふことを聞かない。金、銀、銅、石炭、石油などが出るか、出ない。寧ろ生活必需品の一部にも事を缺くやうな國である。然るにこの躍進日本を生み出したものは何の力であるか、それは日本精神である。日本人は家の爲に、地黨の爲に奉仕すると云ふ世界觀を持つて居る。國に一旦緩急あれば義勇公に奉ずると云ふ世界觀を持つて居

る。天皇様の御爲には身を捨て、惜しくないと云ふ驚くべき世界觀を持つて居る。この觀念が躍進日本を生み出したのである。獨逸民族は須く個人主義的世界觀を一擲して、全體主義の世界觀を取戻さなければ獨逸の明日を期待することは出来ない」と呼びかけたのであります。今まで光を失ひ、希望を失つて居つた獨逸民族は、こゝに光明を見出したのであります。さうして、我も／＼と、男子は十四歳から、婦人は十八歳から、ヒットラーユーゲントに入つて無償で國家に労働奉仕を申出たのであります。この無償労働に依つて、荒蕪地は直に開墾せられ立派な自動車専用道路は數千軒に亘つて出來た。無数の運河は掘られたのであります。陸・海・空・軍共に軍備が充實した。斯の如く無から有を作り上げたのであります。獨逸の金保有高は日本のそれよりも遙かに少い。一億萬圓にも上つて居らない。七八千萬圓程度で金貨は持つて居らぬと云つて宜いその獨逸が、今のやうな驚くべき大きな業を成して居ることを見た時に、日本が何時までも金がないとか、何とか言つて居るのが間違ひである。今まで猶太人が持つて居るものを悉く世界から無價値にすると云ふことが、今回の獨逸の戦争の一つの意義であります。

措てそこで此の際日本人は御神勅に還つて考へ直さなければならぬ。しろしめす世界でなければならぬのであります。この點に付きましては明治以來七十年間の教育が非常に間違つた歩みを踏んで來たのであります。これは已むを得ないことで、何人を咎めることも出來ないかも知れませぬ。歐洲の文化が澎湃として入つて來たのでありますから、聖徳太子様のやうな方でも御出になりますれば、これをよく眞に消化することが出來たのでありませうが、さう云ふ賢哲は千年か二千年に御一人であります。それ故に明治以來の功臣に出來ないと云つて苦情を申入れる筋はないのであります。併も残念至極の幾多の事蹟が残されて居ります。ところが幸か、不幸か、滿洲事變が起り國の狀態が一變したのであります。それから今回の支那事變が起り、聖戰と云はれ、八紘一字と云ふ聲が方々から聞えて來ると云ふのも、國民が皆目覺めつゝある證據であります。早く目覺めないと世界から落伍してしまひます、時間を争

ふのであります。ヒットラー總統が今日の獨逸を作り上げたのは僅か八年であります。日本もこの道を進むには、どうしても無理な統制經濟と云ふやうなこともやらなければならぬことになつて居ります。それに國民が不満を抱き不平をこぼしたりするならば、國際共產黨の魔の手に乗ります。コミンテルンの本部から何と指令が來て居りますか。日本人の不平をこぼし、この物資統制に堪へられなくなつた機會に乗じて赤化思想を宣傳し、國內を擾亂してしまへと云ふ、非常な危険なことを指令して居るのであります。今共產黨と云ふものは組織だつては存在が明かでありませぬ。併しながら全面的に薄色に染つて居るのであります。非常に危険であります。この統制經濟は今までやつたことのないのでありますから、こゝに非常な無理がある。又不公平なことも起ると思ひます。これは當事者も能く知つて居りますが、この國運の方が先に進んで、人の方が遅れてしまつて居るのであります。政治が遅れ、教育が遅れ、産業組織が遅れ、經濟の機構が遅れたのであります。詰り英米流の自由主義組織を以てしましては、日本の達成すべき使命を果すことが出来なくなつたのであります。こゝに非常な困難を感じる次第であります。我が日本人は由來天才的民族でありますから、必ずや古今未曾有の世界變局に見事に對應して、この困難なる時勢を乗切つて進んで行くと思ひます。

ルーデンドルフ元帥は、第一次世界大戰に於ける獨逸の敗因の第一として、カイゼルが猶太の有力者達を用ひたことであると申して居ります。その猶太の有力者と云ふのは、例へばハンブルグ・アメリカン汽船會社の總裁を勤めて居つたバリン、經濟獨裁官に任命されたウテナウ、或は獨逸の大富豪スチンネス皆猶太人であり、斯う云ふ人々を使つたから結局獨逸は悲惨な敗亡を招いてしまつた。これはカイゼルの罪と云ふよりも吾等の罪に歸すべきものであつたと申して居ります。この恐るべき猶太の秘密力は、今や獨逸、伊太利を除く歐米の小國に至るまで、政治、經濟機關に深く浸透して居ります。猶太主義は歐米文化から出で來つた毒の花でありますから已むを得ないのであります。

就中英・米・佛蘭西は病膏盲に入り、彼等の所謂自由主義、民主主義、議會主義が國の大本を蝕みつゝある状態になつて居ります。さうして彼等は民族團結の中心たる王室を、革命を以て崩壊せしめたのであります。その結果獨逸、澳太利、希臘、セルビア、ブルガリヤ、露西亞、土耳其の王冠が捨てられてしまつた。あとの葡萄牙や和蘭や瑞典や、諸威や英國の皇室は猶太最良でありますから、暫く存在して置かうと云ふのであります。それで今度の戰爭が起つたのであります。英國の皇室は完全に猶太化されて居るのであります。その結果前のウインザー公が退位した譯であります。このウインザー公の退位から、英國は西山に日が傾いてしまつたのであります。この王室が減んだ時に猶太は歡喜の祝盃を擧げたと申すのであります。日本の人は、外交官でもさうであります。歐米の人を國別に見分けることが出来ない。英國人も、獨逸人も見分けが出来ない。況や猶太人を見分けることが出来ない。同じやうに見える。だから猶太人の特質も分らない。日本にも澤山入つて居るけれども分らない。皆亞米利加人と云ひ、獨逸人と稱して居りますから分らない。西洋人に聞けば直ぐ分るのであります。これが自分の國籍を持つた國を滅ぼすのでありますから恐ろしい。さうしてその世界的の見えない帝國を造つて居るのでありますから、その帝國の利益に反する場合に於ては、自分の國籍を持つた國も滅ぼしてしまふのであります。米國のルーズベルト大統領は和蘭から出て居る人でありまして、ローゼンベルグといふ猶太人であるといふ人もあります。兎に角猶太の勢力を以てその周圍を固めて居るのであります。大統領夫人は非常な社會的な人であつて、共產主義者と云つても差支へないほどの人であります。又彼の所謂ブレン・トラストは、モルゲンソー大蔵大臣を初めとして六人まで悉く猶太人であります。ブレン・トラストと云ふのは大統領の政治的な最高顧問であります。秘書官も猶太人であります。即ち亞米利加大統領は猶太の金力を以てしなければ大統領に就くことも出来ないであります。ルーズベルトが第三期大統領の任に就くやうになるならば、必ずや猶太の金力が加勢をするからであります。必ずしも彼獨りの力ではないのであります。大した人では

ないと思ひます。亞米利加の金持は全部猶太人であります。世界の金の七割は猶太人が持つて居ると云ふのであります。合衆國にあるところの大部分の金貨と云ふものは猶太人が持つて居る。だから亞米利加政府そのものは貧乏であります。毎年何百億圓と云ふ赤字公債を發行して居る。これが無限に續くものではないから、何時か破綻する譯であります。併しさう云ふことを考へて居ることは出来ません。失業者は千九百二十九年から今日まで千二百萬人を下ることが出来ない、ニューデイルと云ふのは猶太人の政策でありまして、唯失業者に金を呉れて居るばかりであります。だから失業者は減らない。何故かと云ふと、職務に就くよりも失業をして居る方が遣んで居つて唯金を貰ふのでありますから、誰も働かうと云ふ希望が起らない。況や機械力が發達しまして、勞働力が要らなくなつて居りますから失業をしてしまふのであります。機械から排斥を喰つて居るのが亞米利加の現在の人であります。物質文明が妙な方に行つてしまつて居るのであります。金力萬能になつて居る。これ位金が力を振ふ處はない。人格ナンといふよりも、金力が上であります。人間に位と云ふものはないのでありますから、金を持つて居る者が一番威張つて居るのであります。

斯して道徳は崩壞して居る。自動車は何しろ六人に一臺位あるから、運轉手などは間に合はない。皆自分で運轉するのであります。これを見て歸つた者は、亞米利加は婦人が自動車を運轉をする日本婦人も須く自動車位は自分で運轉しなければならぬなどと云ふことを言ふ人があるが、非常に間違ひであつて、この自動車を自分で運轉する爲に事故が非常に多いのであります。日本が支那事變で以て二箇年間に犠牲を拂つたその人間の數よりも、同じ期間に紐育附近だけでも自動車の事故に依つて死傷した者が多い、即ち十萬人に上つて居るのであります。自動車は殺人車となつて居る。その位事故が多いのであります。實に物質文明の墮落した手本が合衆國にあることを見なければならぬ。その合衆國の文明を謳歌して居るやうな日本人であつたならば、到底亞細亞の新建設は出来ません。蔣介石の夫

人の宋美齡でも、宋慶齡でも、皆亞米利加の教育を受けたものであつて、皆基督教徒である。こんな者の口車に乗つて蔣は日本に對抗して居るのであります。この一切の魔車を東亞の天地から取つてしまはなければ、眞の亞細亞の文明を興隆することは出来ないであります。文化の戦ひであります。それには先づ第一に亞米利加を叩かなければいけない。今日彼地に居る日本人の第二世、第三世は實に憂ふべき状態であります。早くこれは引取つて眞の日本人に仕直さなければいけない。或は彼等に、その使命を含まして、汝がそこに居るのは何の爲か、將來東西文化の交流點にお前は位置して居るのである。日本民族の先鋒に居るお前達は、東洋文化を代表して皇道を四海に布く先鋒隊とならなければならぬ。亞米利加人になつてしまつてどうするかと云ふ覺醒を促さなければならぬのであります。大きな任務が彼等に與へられて居る。それを拓務省邊りがさう云ふ高き理想を持つて居らない爲に、唯空しく大事な日本民族を捨てて居つたのであります。南米ブラジル邊りは一番日本から遠い處でありまして、あゝ云ふ處に事が起つても日本から保護することが出来ませぬ。捨て置けばインデアンと同じになる。インデアンは斯して文明から遅れた民族である。早くブラジル邊と交通を頻繁にして、飛行機などの定期航空をして文化が途絶えないやうにしなければいけない。

話は横道に入りましたが、佛蘭西前首相のグラジエ、或はブルム、マンテル、デルボス、ボンネと云ふやうな人は何れも皆歸々たる猶太人でありまして今回悉くベタン政府のために監禁されてしまつたが、今のベタン總理大臣の前の總理大臣レイノーと云ふ人も、小さい時分から猶太人に育てられた人でありまして、猶太人と云つても差支ありません。斯う云ふ人々が政府を造つて居つた爲に、佛蘭西の軍隊は、猶太人の爲に生命を捨てることは欲しないと云ふので、戈を捨ててマジノ線その他要塞から戦はずして退却したと云ふことが分るのであります。猶太人はその國籍のある國家よりも、猶太の世界制覇の爲に世界的な運動に没頭して居るのであります。彼等の戦は思想戦であります。

す。金力戦であります。思想戦の方では自由主義を各國に播きちらすのであります。この自由主義組織と云ふものは、政治でも経済でも統一を失ひ、バラ／＼に無力とするのであります。日本の議會制度を御覽になつたならば、バラ／＼になつて無力となつて少しも國家のお役に立たないと云ふことを現實に御覽になるのでありませう。これが猶太の自由主義組織と云ふものであります。天の安河原に神集ひに集ひ、神議りに議りと云ふのが日本の議會の本體であります。さう云ふ精神で立上らなければならぬのでありますけれども、今日までの議會は猶太の自由主義組織になつて居りますから、統一を失つてバラ／＼となつて少しも海外に威を揮ふことが出来ません。力を發揮することが出来ません。これが日本の議會制度の現實の有様であります。それ故に既成政黨は解散をしなければならぬと云ふことになつた譯であります。時代に要求されて居るのであります。何も近衛さんが起つたからではない。若しも解黨しなければ時代から落伍してしまひますから、他に生きる道はないのであります。これが猶太の政策であり、英米佛の現實の姿であります。

斯して佛蘭西も英國も獨逸に對して向ふ力がなくなつて居る譯であります。異體同心と云ふことは非常に大事なことであります。異體同心と云ふことが出来ないやうな状態に仕向けて居ることが自由主義組織であるのであります。普通に自由と云へば大變善いことのやうであります。さうではない。この自由主義組織と云ふのは企んだものでありますから、億兆一心が出来ないやうにして居るのであります。だから一定の國策を行ふことが出来ないのであります。マチノ線その他の要塞線から、佛軍が抵抗らしい抵抗もせず敗退してしまつたのは、斯の如き猶太人の政府に愛想をつかし、戦闘精神を喪失したからであると云ふことであります。それ故に佛蘭西は速にこのやうな状態を蟬脱し、獨逸に倣うてその自由主義組織を改めてしまはなければ、眞の佛蘭西をして立上ることが出来な

い。暫く恥を休めて獨逸に屈服する外に道なしと考へて、ベタン總理大臣は無條件で降伏を申出たのではないかと申すことであります。このベタンと云ふ人は、第一次大戦にはヴェルダンの要塞を守り通した武勳赫々たる將軍であります。今上陛下が、皇太子殿下であらせられて御渡歐遊ばされた際、ベタン將軍からヴェルダンの要塞戦の御説明を御聞きになつたのであります。この時のベタン將軍は、顔面涙で潤うて居つたと云ふことであります。實に非常な愛國者であります。この將軍は嘗ての大戦にヴェルダンの要塞の上に立上つて、敵弾雨飛の中に在つて指揮して居つたのであります。自分には弾丸は當らなかつた。當つても構はない。身命を祖國に捧げて戦つたからである。斯う云ふ愛國者であります。それ故にこの人の熱意のある御説明には、皇太子様も非常に感興深く御聞き遊ばされたのであります。このベタン元帥が今度降伏した。それも無條件で降伏した。ベタン元帥と雖もどうすることも出来ない國情となつてしまつて居つた。嚮に人民戦線内閣が出来て猶太人のブルムが首相となつた以來佛蘭西はがた落ちに廢頽してしまつたのであります。

この人民戦線内閣と云ふのは、昭和十年夏十月、モスコの國際共產黨大會に一つの決議が現れたのであります。その決議は、今までは第三インター・ナショナルは、第二インター・ナショナル、即ち自由主義、民主主義、議會主義を敵に廻したけれども、今後は民主主義、自由主義、議會主義の第二インター・ナショナルを味方とし、ファツショを撃たなければならぬ。語を換へて言へば、獨逸と伊太利と日本を撃たなければならぬ。その爲には人民戦線を造らなければならぬと云ふので、初めに出来上つたのは西班牙の人民戦線内閣、次に出来上つたのが佛蘭西のブルム人民戦線内閣であります。東の方に於ては支那の抗日人民戦線であつたのであります。斯して東西に戦争が起つたことを見る時に、如何に昭和十年の夏のインター・ナショナルの決議が大きな影響を世界に及ぼして居るか云ふことが分るであります。これ以來佛蘭西はがた落ちに落ちてしまつたのであります。日本にも危ぶなく人民戦線が立ち

さうでありましたが、幸にも加藤勤十一派が検束され、人民戦線内閣が出来なかつたのであります。人民戦線内閣が出来たところでは、國勢は必ず廢頽してしまひます。西班牙もさうであります。

それを能く知つて居るヒットラー總統は、實力を貯へる上から、金力の上からは惜しいものであるが、思ひ切つて猶太人を國外に放逐してしまつたのであります。この猶太人と共産黨とはどう云ふ關係があるか。この關係は非常な秘密のものであります。或るものは關係を認めることが出来ないと云ひ、或るものは密接不可分の關係があると云ひますが、これは切つても切ることの出来ない關係があるのみならず、猶太人が共産主義の本来本元である。それは自分が共産主義であると云ふ意味ではない。猶太の國蘇聯邦は共産主義といふ思想戦の武器を左手に持ち、帝國主義といふ兵力戦の武器を右手に持つた兩刀使用である云ふことを知らなければならぬ。斯して世界を制壓して猶太の大帝國を建設しつゝあるのであります。思想戦の一つの武器として共産主義を使つて居るのであります。それを日本の學生の中に之を目して理想理念だと思つてそれに飛び付いて行く人がありますけれども、大きな間違ひである。猶太はこれを手段として居るのであります。共産主義などが成立つ道理はないこと位は彼等は充分に知り抜いて居る。共産主義にかぶれる日本人の中で一番學生が多い。それはどう云ふ譯であるか。學生は無色透明、何の思想も持つてないからである。何にも思想がないのでありますから、共産主義が入つて来れば共産主義に囚はれる。學校の先生方が日本精神を説かないから、共産主義が入つてしまふのであります。他の思想を噛み分けて、さうして運び取つたと云ふのではなく、何にもないところの頭へ入つて来るのが共産思想であるから、學生が一番初めに染つてしまふと云ふのであります。日本の教育が如何に化石して居るか云ふことが分る。人の子供を毒すると云ふのは今の教育であります。それを能く知つて居りますから、ヒットラー總統は、惜しいものであるけれども十五萬人の有力なる猶太人を放逐してしまつたのであります。後にどの位残つて居るか。まだ何十萬といふものが残つて居るのであります。

ども、兎に角有力なる分子だけは害をしますから、全財産を奪つて國外に摘み出した譯であります。その中二萬七千人が上海に上陸したと云ふのでありますから、日本人も實に抜かつて居るのであります。これが必ずや上海の租界附近にだにのやうにへばりついて、亞細亞の新秩序建設に大きな邪魔をすると思ひます。ヒットラーが猶太人を放逐した時には、獨逸の要所々々の八割七分は猶太民族が占めて居つたと云ふことであります。局長とか、課長とかと云ふ要所にさう云ふ猶太人が居つたらしいのであります。その有力なる猶太民族を一舉に放逐してしまつた。獨逸を追はれた猶太人の多數は上海に上陸してしまつた。日本は唯徒らに八絃一字と云つて、誰でも彼でも取入れて宜しいか、よくよく熟考しなければならぬことでもあります。

この八絃一字と云ふ言葉を能く申しますけれども、神武天皇様は『六合を兼て都を開き、八絃を掩うて宇と爲す』と仰せになつて居りまして、唯八絃一字とだけ仰せになつて居りませぬ『六合を兼て都を開く』と云ふことはどう云ふ意味であるかと云ふことが大切である。萬世一系の天皇のしろしめす日本國を中心にして、初めて八絃一字の理想を顯現することが出来ると云ふのであります。日本を抜きにして八絃一字と云ふことは無意義であります。東亞協同體と云ふのも中心のない言葉であります。日本を中心にして初めて世界は救はれるのであります。協同體はない。ある公會堂で某學者が日本精神とは博愛であると云ふことを申したのであります。それは間違ひである。『博愛素に及ぼす』と云ふことでなければならぬ。博愛と云ふやうに、そんな漠然とした觀念ではいけない。日本を中心にして近きから遠きに及ぼすことに於てのみ、それが道徳となるのであります。無差別に、人の親も、自分の親も同様に考へると云ふやうな博愛ではいけない。そこに序を立てると云ふことに於て東洋道徳は輝くのであります。日本精神と云ふものは博愛素に及ぼすであり、八絃一字と唯言つてはいけない、六合一都と云ふことを加へなければならぬのであります。この言葉を田中智學先生が言ひ初めたなどと言つてはなりません。神武天皇様が仰せになつた

お言葉を、國民が自分のものにするやうなことであつてはならない。兎角斯う云ふことを自分のものにしたがる事は間違ひであります。

斯う考へて來ました時に、この『しろしめす』社會を世界に及ぼさんとせられるのが、天皇の宏大なる御天職であり、我國の使命でありまして、古來天の詔を以て深へる國を修理り固め成す『修理固成』と申して居ります。深へる國とは、君臣の大義が確立せぬ爲に道義の標準が立たないのであります。隨て善惡邪正が社會情勢に依つて變轉し、國內では君臣、父子相争ひ、國外では權益を掠め、領土を奪合ひ。鬪争堅固の世界を現出してしまふのであります。斯る憐むべき世界に光を興へ、平和を興へる爲に、皇國日本の存在の意義があるのであります。神武天皇様は『六合を兼て都を開き八紘を掩うて宇と爲す』と仰せられて居るが、萬世一系の天皇のまします神國日本を中心として、世界に平和を興へるのであると仰せられて居ります。非常に宏大なる御宣言でありましたが、當時の日本民族は皆一齊に何と御答申上げたかと云ふと、『そんな宏大極まる御理想はもつと後にして戴きたい、暫く平和を願ひたい』と今日の人は申上げるでありますが、その頃の日本民族は非常に偉かつたと見えまして、『現實に灼然なり、我も亦恒に念としつゝ宜べ、早に行給へ』。『現實に灼然なり』御尤であります、『我も亦恒に念としつゝ』かぬん／＼考へて居ります。『宜べ』と云ふのは非常な結構な御宣言であります。『早に行し給へ』直ちに御進發遊ばされるやうにと申上げて、直ちに老若男女を執つて、天皇の御軍に従ひ奉つたのであります。今や興亞の御大業は、天皇の御親征の軍でありまして、日本民族は當時と同じやうに矛を執つて老若男女一齊に立上つて居るのであります。大伴家の祖

道臣 命は詠嘆して歌うて曰く、

海行かば水漬く屍 山行かば草むす屍

大君の邊にこそ死なめ かへりみはせじ

これこそ今や深へる東亞大陸修理固成の御大業の軍に従つて居ります人々の口からも漏れて來る歌でありまして、皇軍の行くところ感激を高める譯であります。

今から七十年前、景岳橋本左内先生——この方の御墓は福井市の真中の顯本法華宗のお寺にあります。獨逸語が出來た方でありまして、維新の志士の中に於て最も世界の情勢に精しい方でありました。西郷南洲先生でもどなたでも世界の情勢はこの方から聞いたのであります。安政四年、年齢僅かに二十四歳、當時亞米利加、露西亞、英吉利、佛蘭西の壓迫が非常に加はり、開國の議、攘夷の論が日に盛になる中に起つて、先生は先づ第一に世界の大勢を見たのであります。さうしてその意見は、鎖國の法を改めて斷然國を開くべしと云ふのであります。肇國の理想に依つて速に國を開かなければならない。併しながら聞くに付ては一大覺悟を要する。どう云ふ覺悟であるか。將來は國際聯盟の如きものが作られるであらう。さうして戰爭を防ぎ、強大な國家がこの牛耳を取つて指導するに至るであらう。その牛耳を取る國家は英國か、露西亞であると先生は言つて居るのであります。日本も單獨聯盟に對することは出來ませぬから、已むを得ず露西亞と同盟するか、英國と同盟しなければ立つて行くことが出來ないであらう。併しながら露西亞と同盟するならば英國と一戦を覺悟しなければならぬ。日英同盟するならば日露戰爭を覺悟しなければならぬ。それが嫌ならば、朝鮮と沿海州と滿洲とを併合し、亞米利加か若くは印度に植民地を開き、世界一等國にならなければ印度となつて亡びると云ふことを申して居ります。この人が二十六歳で亡くなつたことは我國にとつて非常な大きな損失であります。明治維新は第一流の人が殆ど死に絶えて、第二流、第三流の人に依つて作られたものでありますから、もう一段磨きをかけなければならぬ時に、惜しくも當年の志士は位人臣を極め、巨富を積み、墮落してしまつたものでありますから、この維新の指導精神と云ふものが泯滅してしまつて、輝かしい、明治天皇様の本當の大御心が達成しなかつたのであります。兎も角吾等の偉とするところは、その海外雄飛の前提として先づ

内政の大改革を必要と考へたことであります。左内先生は、先づ内政の大改革が必要であると云ふことを申されて居ります。而もその大改革が制度を以て末とし、人物を以て本として居ることでありませう。今のやうなどう云ふ組織とか、どう云ふ制度とか云ふことばかり考へて居るのではない。人物を以て本として居ることでありませう。今や國防國家、戦時體制の聲が高いのであります。古來細矛千足國（こまはしらちよつとく）と申して居りますのがその意味であります。どう云ふ意味であるかと云ふと、戦略的好位置を占め陸海空軍の充實した國を指して千足國と云ふのであります。斯して浦安の國と云ふことが言はれるのであります。浦安と云ふのは人々の心が安定、安まる所と云ふことであります。安國と云ふことであります。

私はこの間日光に参りましたが、日光の金谷ホテルの主人公が斯う云ふことを申して居りました。こゝには亞米利加や上海の富豪が時々來遊する、何の爲に彼の人達が來るのかといふと世界中に安住の場所は何處にもない。歐洲は無論の話、亞米利加と雖も彼等の生命、財産を託する所はない。又精神が安んずる暇は一分間たりともない。到底さう云ふ所に百年中居る譯には行かない。どうしても日本に來てこの明媚なる風光に浸り、心を休めて休養しなければ命が續かない。然らばあなたの方の財産をこちらに持つて來たらどうかと申したら、その人達の言ふのに、それは固より吾々の欲するところであるけれども、如何せん國法が禁じて持つて出ることが出來ないのであると申したさうであります。日本こそ本當に浦安の國であると云ふことを、眞に日本の人が知らなければならぬ。今少しばかり物資に困つて居りますけれども、斯う云ふことを歐洲列國の人々に聞かせたならば皆羨ましく考へるのであります。到底夢の國としか考へることが出來ないのであります。向ふでは非常にセチ辛くなつて、隣一寸一本と雖もたゞ擦る譯には行かないのであります。

それには制度の改革よりも、日本人として眞の日本人に還ることが一層大切であります。悠久幾千年の國史に還ることであります。ナチス獨逸の業績を驚嘆の眼で眺める者がありますが、その精神は多く日本の國史を貫いて流れて居る日本精神から汲み取られて居るのであります。

歐洲の戦ひは、程なく獨逸軍は英國を侵略するであらうと思ひます。それは世界の人今日は何人も疑はない所であるけれども、併しながら、英國を失つた後の世界の處置と云ふものは、ヒットラーと雖もちよつと考が浮んで來ないのであります。世界の陸上の五分の一を持つて居る所の大英國といふ頭を奪つてしまつて、後の團體の處置をどうするかと云ふことであります。獨逸一國では手に餘る、これが漂つてしまふのであります。人類は蜂の巢をつつ突いたやうになつて、纏りが付かぬことになるのであります。彼は此處に大きな悩みを持つて居ります。それ故に佛蘭西を占領することはしないであります。ベタン元帥も暫く獨逸の手を借りて、血潮を以て自分の國內から惡魔を一洗することに骨を折るであります。斯して新なる歐洲の文化が芽生えるまでに相當な時間を要することと思ひます。而も猶太の思想は英米にこびり付いて居りまして、強大なる金力を持つて居りまして、思想戦に於ては年功を経たものでありますから、此の猶太との決戦が大きな問題となるのであります。それ故に今度の戦ひは、歐羅巴の人はヒットラーと猶太との戦争であると申して居るのであります。日本はその一面を同じ意味合に於て戰つて居るのでありますけれども、日本の者はまだ自覺をしない。唯戦ひに引摺られて居ると云ふやうな状態であります。獨伊の人は自覺をして戰つて居るのであります。我國は不自覺で戰つて居るだけでありまして、差はそれだけであります。同じ方向に向つて居ることには間違ひないのであります。而して最後に猶太民族を救ふことは、日本の國の力以外にはないのであります。猶太民族は遂に最後には日本に依つて救はれなければならぬ運命を持つて居るのであります。さう云ふ事を言へば今日の猶太民族は笑ふであります。けれども、彼等の前途を能く諦観するならば、彼は國を持つて居りませぬから、遂に國無き民は亡びてしまふのであります。そこに日本が彼等に安住の地を與へてやるか、兎に角彼

に所を得せしむると云ふことが日本の天職となつて残るのであります。それは獨逸のヒツトラーの手では出来ないの
であります。それ故に今後の問題は、日本の國體に指導を求めて來なければならぬ。殊にこの日本の國體と云ふも
のは、法華經に依つて裏付けられて居るのでありますから、法華經の開顯統一の精神に依つて世界の文化は統一さ
れる。その方向に向つて進みつつあるのであります。日本の國民は非常な大きな使命を背負つて居る譯であります。

漏れ承るのに、今上陛下には非常な御軫念であらせられます。普通の人にはどう云ふ御軫念が分らない。側近の人
すらも分らない。併し伺ひ奉る所に依りますと、支那に付ての御心配は無論であります。世界の人類に付て御
心配が御深いさうであります。日本の天子様の御天職が、世界人類を救ふと云ふことにあるのでありますから、そこ
に御心配のあることは當然であります。現代の人は考へ方が小さくなつて居りますから、大御心を親ひ奉る資格
は失つて居ると思ひます。その爲に國內が斯うさわつくのであります。本當に日蓮上人の言はれたやうな、法と國と
を能く考へ直して、世界を指導すべき時が來たのであります。日蓮上人の時分には、その時機が多つて居らなかつた
けれども、今や時運は到來したのであります。この際に於て、日本民族が不自覺で居ることは何としても残念なこと
である。而もその道は近いのであります。私共は今日の機會を一つの大きな覺醒の日と致しまして、愈々皇國の爲に
精進しなければなりません。本年は神武天皇の御即位以來二千六百年、日本の肇國から申しましたならば百七十九萬
五千年に當るのであります。私は殊に教育勅語發五十年祭を迎へ、聖戰のさなかに際會して、お盆の中日に於きま
して、こゝに自分の所懐の一端を披瀝する機會を與へられたことは洵に喜ぶべきことと同時に、どうかこの日を契機
として、この統一團だけでも心を纏めて、さうして億兆一心の眞の日本の臣民に戻られんことを念願して止まない次
第であります。(終)

日蓮義東北開教史實 (後編)

中 村 謙 藏

ロ、後 段

前回に引續きまして今日は成可く結末をつける様に申上げたいと存じます。

此の前は日蓮聖人の御直弟子方の東北布教宣傳として、日持上人と中老僧中の日門上人、日辨上人の御開教の事を
申上げ、尙信徒側の活動としては妙義尼、それから南部家勤王五代の事蹟一斑を申上げた次第であります。

今日は幕府時代に下りまして、如何なる立正主義者の活動があつたかを申上げて結びと致したいと存じます。
幕府時代に於きましては、色々活動なさつた方も勿論多いのであります。就中日蓮主義を正當に傳へられた方
は、我々の宗旨の開山、再興の祖と仰ぎます日什大正師を、筆頭と致さなければならぬと存じます。日什上人の事は
委しく申上げると際限がありませんから、ごくかいつまんで申上げます。

日蓮聖人入滅後三十三年目に當る、正和三年四月二十八日、奥州の會津に生れた方で純粹の東北系の方でありま
す。幼にして兩親に別れ、十九の年御出家に相成り、其の當時の佛教大學と申しますか、綜合大學とも申すべき、京
都の比叡山に登られまして、慈遍僧正といふ方によつて出家得度せられ名を支妙と改めました。御出家以後三年目は
而かも建武中興の成つた年であります。

前回申上げた、南部氏勤王や大楠公の忠誠といふ時代は、日什上人の極く若い二十三四か三十頃迄の間であり、南
北朝對立時代は實にその御生涯中であります。

正平六年北朝觀應二年三十八歳には、比叡山の能化職といふ大學者になられました。それから建徳二年、北朝の應安四年には、齡五十八にして、會津の領主輩名家の懇請によりまして、一度會津に御歸りになり、そして有名な東山温泉の左の側に、大きく聳ゆるかの羽黒山に、東光寺といふがあり、領主歸依の寺であります。この寺の住職になられました。何しろ玄妙能化が奥州の東光寺の住職に居られるといふので、一時奥州の各地より學徒が雲の如く集りまして、その學徳は東北を風靡する勢であつたのであります。

在山九ヶ年を過ごしまして天授五年、北朝の康暦元年に、玄妙能化は六十六才であります。が不思議な縁によつて、日蓮聖人の如説修行抄一卷と開目鈔上下二巻とを羽黒山東光寺に於て御覽遊ばしたのであります。そこで天下を風靡した學者がこれ程大義名分のはつきりとした、法華經の中樞ともいふべき本當の精神の現れである日蓮主義、法華經の心髓を御書きになつた著書を御覽になり、是ある哉と案を叩き驚喜せられ、今天下の有様を見ると麻の如く亂れ、天日雲に蔽はれて居り、豫ての疑氷一時に融解した感がある、かゝる時勢に於て安閑として居る事は、到底出來ないと云はれた天台の學者として己も許し、人も許して居た玄妙能化は、爰に顧然として日蓮主義に轉じ、自ら名を日什と改められ。爾來此の主義を強調せられました。

然るに弟子達は、我師玄妙能化は氣狂ひになつた、天台の能化とも云はれる大學者は、何を苦んで日蓮の傘下に頭を垂れるのか、若し玄妙能化が日蓮に改宗するといふ事になつたならば、日本天台の大恥辱である。寧ろ此際師を亡きものにするは、宗義に忠なる所以であるといふに一決したのであります。不思議にも上人はこの難をば免れましたが、其の時一寸お隠れになつたお釜岩といふ遺蹟が今もありますが、此處に避難されたのであります。

其後、下總眞圓の弘法寺といふ日蓮宗の寺に行かれました。日蓮聖人のこの大義名分、立正安國主義に關する、凡有る御著書を御覽なされたのであります。そして益々日蓮聖人の教義を慕はれ、遂に六十餘才の老軀を以て本當の立

正安國主義を實踐し、『死身弘法不惜身命』の大精神を發揮して、身を以て之を行ひ、國難に當る偉大の決心をなされたのであります。

恰も日蓮聖人の百回忌に當る永徳元年、此の年京都に上られました。どうしても朝廷に立正安國主義の大主張を奏上しなければならぬと考へられ、北朝方の過れる國體觀念を一掃して天日を再び南朝に歸し、この變態的日本の政治を王政復古に還元しなくてはならず、建武中興の失敗は他に幾多の原因もあらうけれども、日蓮主義の上から見ると一王一佛主義の法華經精神の根本を紊したるに基因するのであるから、早く南北朝の對立を一掃し、正閏を正さねばならぬといふ精神を以て京都に上られ、そして先づ第一に、妙顯寺の日霽上人といふ方の斡旋によりまして、永徳元年六月二十二日には鷹司中將殿に就て二條關白良基を奏聞され、終に泉御殿に於て會見されました。

日什上人は立正安國論及び目安といふものを捧げられ、大義名分の法華經に基き重要進言をなし、一天四海皆歸妙法の本旨を、至尊に奏上されん事を申上げたのであります。次で武家に對し、大いに諫めなければならぬといふので、六月二十九日には足利義滿に面謁されたのであります。

中々其の當時でありますから面倒な事であつたらうが、終に義滿に面會されました。立正安國論と訴狀とを提出し、日本は一天萬乘の、大君の治しめす國であり、武家たるもの、擅に政權を握るべきではないのに、今日の實情は甚だ恐れ多い事で、怪からん次第であると、極力義滿に諫訴したのであります。そこで北朝の後圓融院は敬感の餘り、二位僧都の口宣を給つたのであります。

其の時の論旨は

洛中弘法事

御奏聞之處被_レ聞食_レ訖_レ早營_レ道場_レ可_レ弘_レ一乘圓頓之教法_レ旨勅免所_レ候也

專一宗之勤行、宜奉祈寶祚延長四海安全、者天氣如、此仍執達如件

永徳元年七月六日

左少辨 在判

五〇

二位僧都玄妙御房

日什上人が北朝方を諫奏の目標とされた事については、なほ後段申上げることゝ致します。そこで日什上人は二位の僧都といふ口宣を御辭退申上げ、殊に御下賜品などもあつたのでありますが、御下賜品は兎も角として、二位の僧都といふ榮職は二條關白殿まで御辭退申上げた所が、鷹司中將より白さるるには「お前はそういう立派な主義の下に立つて立正安國の大義を天聽に達し、而して是を國內に流布するには、二位僧都といふ位を頂戴して居る方が、何かと便宜であらうから御受け致して然るべきである」といふお話で、此をお受けすることに致されたのであります。永徳三年に京都の六條坊門に奄を結んで居られました、更に二條關白良基公に建白されたのであります。所が二條關白殿の白さるるには、今は政權總て足利に移り室町に歸して居るから、たとへお前からそういう事聞いても、俺の力では何とも出来ないことであるから、宜しく室町殿の方に強訴して、貴殿の目的を達成するが宜しからうといふお話があつた。

そこで日什上人が白さるるには「今の世は權を以て實を誇り天下は下刻上になつて居る。須く天子親政にならねばならぬ」斯う申上げた、所が關白殿のお答には「我が意のある所同感であるが、今は南北朝對立し、世は荊蕀と亂れて居る有様であつて、俺が下知しても如何ともする事が出来ない」と活嘆せられたので、日什上人は本當に悲泣の涙にかきくられて、其の座をば立ち己が住寺へ歸られたと記録に書いて居ります。

至徳元年には奉行所松田丹波守に建白せられ、管領細川武藏守にも訴へられて居られます。嘉慶二年に義滿は、富士の巻狩を催した事は、史上有名であります、それを聞き付けた上人は、その出向先に押しかけ行きて、義滿の旅館に訴へ出でた。上人時に齡七十五才の老人であります、普通ならば榮々隱居生活をなさるべき御境遇であります。その時館を警固する武士は驚いて、埒外に追ひ出し申したが、是非面會して法華經思想を上聞に達し、悔悟を求め、政權を速に朝廷に歸さなければならぬと強要せられたが、警固の武士は氣狂ひ扱ひを爲して引攪んで追ひ出され、終にその目的を達しなかつたのであります、日什上人は始終新様な意氣を以て活動なさつたのであります。明徳元年と二年には京都に居られて、今川越後守金吾、松田丹波守、それから足利義滿公には等持院といふ寺に參詣されるといふ事を聞かれました、此度はその庭前に強訴しやうとせられましたが、又此の時も終に目的を達しなかつたのであります。斯うして天奏三度に及び、足利の方には數度斯かる訴狀を出されまして、つぶさに「死身弘法不惜身命」の色讀をなされ、日蓮聖人の立正主義、即ち法華經の大義名分の主張を、公家武家兩方面に非常な勢を以て諫奏なされまして、明徳三年の春齡七十八才を以て會津の妙法寺に於て御入滅になつたのであります。

此の年は丁度日什上人の建言その効を奏したると、世人も又斯く南北對立して、日本國體の明徴を缺くは甚だ相濟まぬといふ事で、五十七年に亘るその對立歴史も茲に解消されました、南北相融和されました。

こゝに特に申上げたい事は、日什上人が六十六歳から十四ヶ年の間、老耄を提げて法華經の大義名分、一王一佛主義に立脚し終始し、建白諫奏せられし目標はなんであつたかといふと、何時でも北朝方と、幕府の足利家でありまして、正統の天子様方へは一度も奏聞強訴といふ事は、なさらなかつたのを見ましても、矢張り日蓮聖人が、謬れる北條幕府を直諫され、天奏の事は、孫弟子の日像上人にお譲りになり、御自分は鎌倉幕府に向つて誤れる政治を御指摘強訴されたのと同じ轍であります。

日什上人は、南朝の天子様の方をば、楠氏或は南部五世の忠誠に委せられ、北朝方、足利武家の方面にその反省を

促すため諫奏を集注し、辛苦艱難を嘗められて、立正主義を強調されたのであります。此の眞意は、實に日什上人勤王の偉い事蹟として、史筆特筆すべき事柄なるに拘はらず、今迄之を明かにして居らぬ様に考へられるのであります。今後、我々はこの點に力を注いで研究し此の精神を發揮し、鮮明にしなければならぬと考へるのであります。日什上人十四ヶ年間の主義宣傳の事蹟は、短いながらも實に偉大なるものであります。或は京都、或は關東關西方面に活躍相成りまして、會津に歸られましたのは、殆ど數ふるに足らぬ僅かの時間でありましたが、日蓮主義、法華經主義の爲に萬丈の氣焰を掲げられたことは、東北生れの日什上人こそ、東北開教史の中軸となすべき、偉大なる活動であると考へまして、その事蹟を申上たやうな譯であります。

其の次は日什上人の流を酌む當樂院日經上人の事蹟であります。

此の當樂院日經上人は、徳川幕府時代の方でありますが、何處のお生れであるかはつきり致しません。奥州に生れた方であるといふ説もあり、或は加賀、又は關東千葉縣方面の方であるといふ三説があるのであります。何れもはつきり致しません。併し天正十年、日經上人は僅か二十三歳にして奥州に來られ、堂々論陣を張りて立正安國主義を鼓吹され、二本松の蓮華寺を開創し、日淨を始め三十餘人の改宗を手始めとし、東北の遊化普く、從て顯本法華宗に屬する寺院は、大方此の方の開基であります。

上人は實に強義折伏を以て生命と致された方でありまして、優柔不斷、優しい事を云ふては、此の天下國家を救ふ所以ではなく、須く日蓮聖人の如く、本當に心血を濺いで命を懸けて、法華經主義のために布教宣傳しなければ、民衆を救ふ事が出来ないとの、非常な意氣込の方であります。五尺の身體は膽其のもの様な偉い方であります。何時でも南無妙法蓮華經の兩側には、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、法華獨得成佛と大書し、當樂院日經とその下に記した旗を押し樹て、大道演説をなし、若し相當の寺院でもあれば、どん／＼其處に進撃されまし

て議論をなし意氣衝天の勢を以て活躍なされたのであります。でありますから、日經上人に對して、非常な迫害をして居るのであります。その強調さに對して、宗内ですら排斥された事實があるのであります。何んせ念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、を眞向から振翳して攻めたのであるのでありますから、各宗の信徒僧侶も、皆日經上人を憎んで、凡有る迫害を上人に加へたのであります。

上人の遺文に斯ういふ事が書いて居ります。

「學問は第二、第一は一人でも勸め入れ地獄に墜ちるのを救ひ度く候」

是は實に簡単な手紙の一節であります。日經上人の御精神が、はつきり表れて居るのであります。

學問といふ事は付屬だ、第三、第四である、第一は日蓮聖人の門下として心得なければならぬ事は、一人でも正しき法に引き入れて、其の人の惡道に墮ちるのを救ふのは、第一の根本精神であるその目的達成の爲に、第二の學問、第三の研究もしなければならぬが、第一の大事は大慈悲の心を以て一人も地獄に墮してはならぬと、斯ういふ意氣込で布教宣傳されたのであります。會律の妙法寺にも一兩年錫を留められまして、東北は此の邊迄、御出でになつたとは思ひますが、創建の寺として、今尙遺つて居るのは二本松の蓮華寺、山形の本覺寺等なのであります。かくの如く奥州は大抵遍歴せられたが故に、各宗の人達は懐へ上つて、怯えたといふ位偉い日經上人であります。

慶長十三年には尾張に於て布教されました、そして有名な、二十三箇條の詰問書といふものを、念佛門徒に向つて發したのであります。此れが爲に、更に非常な迫害を受けたのであります。是より先京都本山妙滿寺の貫主となつて、益々日蓮主義の鼓を鳴らし、大いに論陣を張つたといふ事は、記録にも明かに書いてあります。御文書の中に斯ういふ事が書いてあります。

「日經二十三箇條の法門に付て不惜身命は謗法の根切の修業と云ふ物なるに夫れに違背は謗法無間地獄也」

此の二十三箇條の詰問書を發した事は、素より命を懸けての宣傳である。所が徳川家康は大の念佛信者であつて、芝の増上寺は徳川家の菩提所であるから、淨土系の連中が、徳川家康に讒言致しましたので、家康大いに怒つて迫害の手をのべたのであります。それは慶長十三年十四年に亘つて居るのであります。慶長十三年十一月十五日、江戸に於て念佛門徒を相手方とし、家康の面前に對決する事に決りました。其の時上人より送られたお手紙があります。

まことに涙がこぼれる様な御精神が表はれて居ります。家康の前に出ても勝つ事は確かではあるが直ちに命を取られて了ふであらう、それは覺悟の前である。といふ様に、

「江戸に於て宗論、勝ち申すべき事疑ひなく候、然りと雖御所の御宗旨に候間命はある間敷候、靈山淨土に於ておん目にかゝり可申候テラバ、」 賦府常樂院」

斯うして、今度愈々念願が叶つて公場對決の事に決つた、勝つ事に易々たる事だが、併し乍ら御所の御宗旨の念佛宗論である以上勝つた曉には直ちに命を取られて了ふだらうから、今生の別れである、死んだ以後、お互寂光淨土に於て會見しやうと云ふ、斯う云ふ悲壯な決心を信徒達に示して居ります。此の文書を見て泣かざる人はないと思ひます。此の御決心を持つて、五人のお弟子を伴はれ江戸に乗り込んだのであります。然るに宿にお着きになつたその夜のこと、四五十人の暴徒が闖入致しまして、打擲、打つ、蹴るともお話にならぬ様な、亂暴狼藉の極め限りを盡して日經上人及び御弟子を苛めたのであります。無論これは徳川方或は芝増上寺方、念佛者の徒であることは申すまでもありません。上人方は、或は手を折られ、目は腫れる、口もきく事が出来ない、半死半生の態に陥つたのであります。

然るにその翌日は、登城をせよとて、併も戸板の用意をして來たのであります。そして申さるゝには、家康公の面前に於て、問答をせよ、豫てお前は二十三箇條の詰問狀を出して居るのであるからこれについて面前に優劣を闘へとの、命を傳へるのであります。上人は動くことも出来ない重態であるから、弟子達より、昨晚斯う／＼云ふ暴徒の爲に、口もきく事が出来ないまでの暴行を受けたによつて、特に御猶豫を願ひたひと申し述べましたが、お上に於ては、今日の何時と決めて準備をして居る。そんな不心得があるかといふて、無理無態に、戸板に乗せて城中にかつき込んだのであります。素より日經上人は口をきく事が出来ない、手も動かない、腰も立たない、半ば死んだ様な上人を家康の面前に据え置きました、その周圍の人達から、念佛無間の證據は經文にあるかと問ひました、無論、半死半生の重態一言も返答出来る筈がない。そこで係の役方より、日經は言葉に窮して御返答出来ないものであると申し、念佛無間などと、天下の民心を攪亂し、けしからぬものであると云ふて日經上人から、袈裟と法衣を剥ぎとりました。そして淨土宗は、御面前に於て大勝利を得日經は一言も返答出来兼ねて、全く負けて了つたといふ事を、天下に發表したのであります。實に慷慨悲憤に耐へん次第であります。之を慶長法難と稱して居ります。

十一月十五日日蓮宗常樂院日敬(經の誤ならん) 偽訴類ニ高聞ニ達シケレハ江府御城内へ日敬ト其徒五人ヲ召テ淨土宗増上寺ノ神息所化廓山、大蓮寺ノ了的ト宗論ヲ決セラル時ニ上總介直輝朝臣、蒲生飛騨守秀行、伊達陸奥守政宗、淺野紀伊守寺長、南部信濃守利直、新庄駿河守忠頼入道、同越前守直定、大久保相模守忠鄰、本多佐渡守正信、成瀬隼人正成、安藤帶刀重次、同對馬守重信、土井大炊頭利勝、米津勘兵衛由政、土屋權右衛門直爲、大久保石見守長安、且羅山子道春列居シ嚴密ニ宗論ヲ遂ケラレ畢ヌ」

抑々しき計畫の對論日賭するの感あります。

壓制極まる徳川幕府でありますから、日經上人は涙を呑んで、如何ともする事が出来なかつたのであります。そし

て上人及弟子方には、あられない事を云ひつゝ、民心を攪亂して畏くも公家迄煩はす不敵なものであると、五十幾日も牢に入れたのであります。幸ひ生命には別條がなくて、恢復された様であります。翌年、慶長十四年正月七日に江戸を出まして、高札を立て馬に乗せまして、夜討強盗より甚しい罪人扱ひを以て、京都まで運び、京の六條磔で耳を斬り、鼻を斬るといふ惨酷なる刑罰に處せられたのであります。かくの如き迫害にも係らず、日經上人は幸ひ命をば全うされましたのであります。兎に角耳を斬り、鼻を斬るといふ刑罰は、實に言語に絶する處置と云はねばなりません。

斯う云ふ惨虐な目に遭はされた、日經上人及び其の弟子達は、殆んど怪物の様な恰好になつて居りますから、あれは常樂院日經の一味だ、あれに一椀の供養をもしてはいかぬ、宿を與へてもいかぬと云ふ、非常に嚴重な布令を廻はしまして誰も相手にする者のない様に、仕向けたのであります。若し日經上人に加擔し、供養する様な者があると、引擲されると云ふ有様でありまして、一日も早く死ぬと云ふ政策を採つたのであります。

日經上人の弟子方は、そうなればなる程、徳川の悪政に憤慨し、斯の如き御艱難に對して、一層に同情する信徒が澤山出て來た。だが、そう云ふ事が知れるといふと、引擲されるのであるから、ひそかに御供養申して居つた。日經上人は表向き泊めてくれる人は無し、實に辛苦艱難迫害の限りを嘗めて、所處を流浪されたのであります。其の中に獨り正義の士は、三輪志摩守といふ加賀藩の家老がありますが、此の人は非常に日經上人に同情を寄せ、深く其教を信じまして、加賀の金澤に御招待を致し、日經上人を保護致したのであります。所で徳川幕府の方では、常樂院日經をかくまひ居るは怪しからんといふ事で、一つの問題が起りかけて來たのであります。即ち、日經上人の爲めに、徳川と前田家との軋轢を惹起する結果に陥るので、上人はその事を察して、密かに富山の方に落ちのびたのであります。

そして富山の神通川の附近で、此れ又暴徒の爲に、あえなき最後を遂げられたといふ事でありましたが、其後の事ははつきり致して居りません。

洵に日經上人の如きは、東北各地を遊歴布教宣傳せられ、徳川には斯の如き迫害を受け、本當に法華經の説のごとく、不惜身命の文を色讀體驗された偉い方であります。此の方の手紙はボツ／＼ありますが、此れを拜見致しますと洵に其の當時の上人困憊の狀況が、偲ばれるのであります。御文章二三を書いて参りました。

『申酉兩年御所の御勸氣を蒙り則慶長十四年二月二十日京都六條河原に於て及加刀杖の大難を蒙り畢んぬ』

『關東江戸に於て霜月十五日五六十人の暴行に打擲せられ五人の弟子は水責に逢ひ、而後五十日師第六人を履ましむ及び二年の災難非道國主の糺明關東竝に路次中稱計すべからず』

之は慶長法難直後の御筆と思はれます。

『一時も北國に足を止められず秋田などへ渡るべしと存候北國方皆怨敵になり 云々』

『尙々何時もより氣力なく悪結年々無心元存候能々養生致し候』

『兎に角こゝもと居にくく御座候間七月の頃引拂ひ秋田へ走り申へく候』

何處へ行くにも日經に加擔するものがあつてはならんと、とても嚴重な警戒をしたので、此處にも居たくまらんから、秋田邊にでも行かうと云ふお手紙であります。

それから北國から一時佐渡に行かれたようで、佐渡からのお手紙があります。

『我等煩ひ者氣を少し取直し此方へ相著き申し候若し障碍出來せんは佐渡より秋田へ可渡存分に候』

ここでも周圍から迫害が襲ふて來て、兎に角此處にも居たたまらず、七月頃秋田の方に入り申すべく候と、仰しやつて居るのであります。

立正安國主義の爲に、五尺の身體の置き所なく、或意味では、日蓮聖人以上の迫害を受けたと申上げて宜い位であります。秋田に行かう、秋田に行かう、といふことは御遺文に四ヶ所私は見つけたのであります。斯くまで、秋田に行かうと云はれて居る所を見ると日經上人が、力となされる様な偉い御弟子か信徒が秋田邊に居つたと思ひます。今日はその御遺蹟とする一ヶ寺もなく、これは今後研究を致して見たいと思ふのであります。

日經上人御開創の御寺は、すべて五十餘ヶ寺あります、又そのお弟子になつて、上人と死を同ふする決心を持つた弟子信徒方は、五百八十人もあつたと云ふ事でありますから、其の人達は、秘かに日經上人に御供養申したのでありまじやう。

當盛岡法華寺の御開山日慶上人も、日經上人の御弟子の一人ではあるまいか。その御一人が此處に來られてお開きになつたものであらうと私は信するものであります。

日經上人は斯様に徳川幕府時代に於て、東北方面に顯本法華、立正主義を非常な活動を以て、死身弘法布教致され一人者である事を、御記憶願ひたいのであります。

日經上人のお話は此れ位にして、最後に信徒側の方で、東北布教宣傳に貢献のあつた人を申し上げて見たいと思ひますが、時間がありませんから一二申上げる事に致します。

萬治年間の頃、仙台公の奥方で振子の方と云ふ人がございます。伊達政宗公の子息伊達少將忠宗此の忠宗の室であります。伊達家は御承知の通り正宗、忠宗、綱宗、綱村斯う云ふ順序になつて居り、忠宗の室振子夫人は池田輝政の娘さんで家康公の孫女であります。此の人は伊達忠宗公の室になりましたから、仙臺に於て日蓮主義の振興に大に力を竭された方で、萬治年間に歿なられ法號を孝勝院殿秀岸日蓮大夫人と申してあります。その子綱宗公は、母堂の追孝供養の爲に、法華經の五字に因んで寺を五箇寺建てたのであります。妙法院、法輪院、蓮華院、華光院、經王院、

此の五ヶ寺であります。此の母堂振子の方の、一代の御信仰の餘徳を後世に残すために、三代綱宗公は、斯う云ふ寺を建て、母堂の爲め供養なされたと云ふ位、宮城縣下に立正主義の開教に貢献された方であります。

其の次には仙臺萩で有名な政岡、三澤初子の方であります。此の方も仙臺萩と稱して、今日浮瑠璃義太夫等に謡はれ、一子千松を見殺しにしても、龜千代君、後の綱村公をお助けする爲に、健氣にも忠節を全うした、婦人の龜蓋と仰がれる方でありまして、非常な信仰家で、此の法華經主義の感化によつて偉大なる義烈の體驗者となりしことは争ふべからざる事であります。

三、結 論

以上東北六縣の日蓮主義、立正主義の活躍のために、非常な運動をされた方々の事蹟のほんの一端を申上げたに過ぎませんが、然るにも拘らず、東北六縣に於ける我が日蓮法華宗の實際と云ふものは、實に微々として振はぬ情勢であります。日蓮宗の寺院数は他の宗派に比例致しますれば………實際の力の比例に於ては當らんかも知れませんが、寺院の外形の比例に於ては其の趨勢を察知する事が出来ると思ひます。洵に私共は残念に堪へないのであります。岩手縣の如きは僅か百分の二、二しかない。宮城縣はそれより少し多く二、八。福島は三、一。青森は流石日持上人の御事蹟が残つてゐるだけに一刻であります。山形は二、五。秋田は六、〇。北海道は割合に多く八、六となつて居ります。

斯様な状態で、日蓮聖人以來七百年に垂んとする間、東北、殊に東北と云ふ名稱は、日本國を代表する名詞として、或は印度支那から非常に慕はれた東北の稱呼を、恣まゝにする我が地方に於て我々と致しましては、東北に縁のある法華經主義の、斯くも微々不振の状態である事を、お互切齒扼腕に堪へないと同時に、教徒として宗祖 開祖に

對し、洵に相濟まん事と痛切に感ずるのであります。

以上申上げた事柄は、今後我々の立正主義宣傳の上に、又自己の信仰を一層研き上げる事に於て、多少なりとも發憤の一助となり、將來相提携して妙法宣傳の爲に、共に手を握りあつて此の非常時惡を征服して、日蓮聖人の御理想なる『一天四海皆歸妙法』に、一步を進める事に精進致したいと云ふ事を念願して息まぬ次第であります。

甚だ淺薄な二、三の見聞を申上げたにも拘らず、始終御清聽を煩しました事は、私の望外の喜びであります。茲に深く御禮を申上げて私の話を結びたいと思ひます。

—(終)—

記事

本部團報

夏期講習會 事變の長期に亘るに隨つて國民精神を一層發憤興起せしむべきであると思ふ、されば官民協力一致して教化の運動が旺んに起つて居る。そこで最も適切な人を度し世を濟ぶ方策は、どうしても教主釋尊の明教に倚ることが最も効果的と確信する、併し又大衆の爲めに世間的の教を説いて淺い處から深い道に進ましめることも極めて大切な化導法とされてゐる。爰に本部に於ては、信仰報國第三回の講習會を去る二十四日から二十七日迄、豫告の如く開催した。其の講師と演題は左記の通り、

- 第一日 世界人としての日本人の自覺 外務事務官 箕輪三郎氏
 - 本佛の實在 本團講師 河合勝明氏
 - 第二日 宗教大觀 本團理事 磯部滿事氏
 - 自我偶綱要 文學士 山口智光氏
 - 第三日 法華經を信する所以 横濱專門講師 中村清一氏
 - 桃太郎と我國體 陸軍中佐 岩淵經夫氏
 - 第四日 經濟と日蓮主義 本團理事長 上田辰卯氏
 - 日蓮聖人の御遺文 本佛教會主 和賀義見氏
- 以上

信行會 毎週月曜日朝六時參集の本會は、盛夏と雖も休みなく汗ダク／＼となつて修行に勵み、終つて優婆塞戒經の連續講話に、各自法悦に浴しつ其の日の勤務に精進する、寔に有難い事共であると思ふ。

興亞奉公日 毎月一日朝六時開會、先づ一同は御本尊の御前に勤修して後、法話に一層精神の緊張を覺え、億兆一心感謝奉公の誠を竭し、國策に順應して益々困苦窮乏にも堪え、而も大に身心の健勝を期する次第である。

團費誌料維持費及寄附金領收 (七月二十一日)

一金 貳 圓 也	東京	蓮池完靜殿	一金 貳 圓 也	高岡	高松呈水殿
一金 貳 圓 五拾錢也	郡山	金澤リ三殿	一金 五 圓 也	埼玉縣	繁田醬油店殿
一金 貳 圓 貳拾錢也	岐阜縣	佐藤良淳殿	一金 拾 圓 也	横濱	望月宣諤殿
一金 五 圓 也	北京	高部靜子殿	一金 貳 圓 五拾錢也	岡山	須山茂三郎殿
一金 參 圓 也	東京	花水菊太郎殿	一金 五 圓 也	東京	佐藤大太郎殿
一金 貳 圓 五拾錢也	同	竹内文治殿	一金 貳 圓 貳拾錢也	福井縣	立正安國會殿
一金 壹 圓 貳拾錢也	大阪	廣野貫慈殿	一金 貳 圓 五拾錢也	盛岡	宮川日見殿
一金 貳 圓 貳拾錢也	上海	種村美加夫殿	一金 貳 圓 五拾錢也	福岡縣	阿部秀三殿
一金 參 拾 圓 也	東京	柴田武治殿	一金 貳 圓 五拾錢也	兵庫縣	大石千尋殿
一金 貳 圓 貳拾錢也	岩國	中村明法殿	一金 貳 圓 五拾錢也	千葉縣	吉岡正太郎殿
一金 壹 圓 也	東京	越山雄四郎殿	一金 拾 圓 也	福島縣	如意輪寺殿
一金 貳 圓 五拾錢也	福島	細谷宗司殿			橋本政吉殿
一金 壹 圓 貳拾錢也	山形縣	遠藤貞次郎殿			

右難有入帳仕候也(以是代領收證)

財團法人統一團會計

者は說法せよ、我等聽受せん、今日は則ち當に法を以て食と爲すべし。時に女、答へて曰く、唯須菩提向者の所説は無舉無下なり。仁者云何ん、志願する所有りて想念を懷き精舎に詣て遊居に處せんと欲す。惟須菩提は沙門の行出所止處にして放逸有ること無く、自恣を樂はず、沙門の法にして無所著なり、其れ無所著なれば則ち無恚恨なり、恨を懷かざれば則ち無所行なり、無所行は賢聖の謂なり。八大弟子及び八菩薩、五百の梵志、離垢施女の王波斯匿及び餘の大衆、佛所に往詣して足下を稽首し、佛を繞ること三市し、却て前に在りて坐す。離垢施女、佛を繞ること七市し、世尊の前に住し偈歌頌を以て事を問ふ矣。

我れ世尊に問ひたてまつる

無著は^ま倫んで得難く

清淨は所倚する無し

名稱は量る可らず

衆生を救濟するに

施は甘露の悅を以てす

云何が菩薩は

其の行を成就せん。

佛、離垢施に告げたまはく、菩薩に四事の法あり、樹下に在つて魔の官屬を降す。何をか謂つて四と爲す、未だ曾て他人の利養に貪著せず、志常に綺飾の言を樂はず、無數の人を勸めて本徳に順はしめ、無蓋の慈を以て衆生に向ふ、是を四と爲す。

佛、離垢施に告げたまはく、菩薩に四事の法あり、大富饒財なり。何をか謂つて四と爲す常に恭敬を行じ、施して慢恣ならず、好き被服を以て人に惠與し、常に篤信を懷いて喜樂淳淑に邪見を釋置す、是を四と爲す。

佛、離垢施に告げたまはく、菩薩に四事の法あり、佛土を所願して尋いて意の如く生ず。何をか謂つて四と爲す、若し他人の智慧速成せるを見ては嫉妬の心を懷かず、常に能く六波羅蜜を修習し、諸の菩薩を見ては、之を視ること佛の如くす、發意の菩薩道場に坐すに及び、等心に供順して諛諂無く、未だ曾て虚偽の徳を求めず、便ち能く供養の利を致得す是を四と爲す。

離垢施女、目連に報へて曰く、我が所言の如く至誠虚からずば、吾が將來世に如來至眞等正覺明行成爲善逝世間解無上士道法御天人師號佛世尊と成ることを得ん、此の三千大千世界六反震動す、衆生をして退還者有らしむること勿く、天より衆華を雨し、箜篌樂器鼓せざるに自ら鳴る、我れ女像を轉じて男子と爲ることを得む。

時に大目連即ち坐より起て更に衣服を整へ右膝を地に著け、又手して佛に白さく、今小女子、乃し能く妓道を興發し變化せり、威神無極巍巍尊妙なり、建立す可き所、至誠の願、一

切悉く現じ眞諦瑞應し、當に具足の成果に當りては所言の如し。佛の言はく、是の如し、目連汝の云ふ所の如し。

佛、賢者阿難に告げたまはく、離垢施佛道を志求し、至誠の願を立つ、三千大千世界六反震動し、變じて男子と成るを見る。阿難言見す。

時に大目連、離垢施に問はく、汝族姓子、慧を建立して無上正眞道意を發して以來久遠なり、何を以て女人の身を轉ぜざる。離垢答へて曰く、世尊は仁の神足最尊なるを歎じたまふ、卿、何を以ての故の男子を轉ぜざる。目連默然たり。離垢曰く、女身及び男子の形を以て正覺を達成せず。

★

★

★

★

★

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版	特價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
佛敎の心髓		全	金壹圓七拾錢
勸行作法		全	金拾錢
佛敎の心髓		全	金壹圓
河合彰明著		送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七
 財團法人 統一出版部
 總發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 電話 牛込六九六六番

統一定價
 一冊 金貳拾錢 送料壹錢
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢
 一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
 ▲御申込ハ總テ前金ノ事
 ▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
 ▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御通知ノ事

昭和十五年八月二十七日印刷納本
 昭和十五年九月一日發行
 (第五百四十六號)

不許複製
 編輯部 滿事
 發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 印刷所 東京市小石川區音羽町八ノ十一
 印刷所 野島好文堂印刷所
 電話 牛込六九六六番

發行所 財團 統一出版部
 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 電話 牛込五三三六番
 總發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
 電話 牛込九四二〇番

次 目

公民教養と菩薩行(上)……………	本多日生
開目 鈔講 話(第卅六講)……………	小林一郎
教育勅語と儒佛二教……………	磯部滿事
世界人としての日本人の自覺……………	箕輪三郎
靈蹟巡拜偶感……………	金子妙華
北白川宮殿下を悼み奉りて……………	本郷日常
大磯紀行……………	金城三郎
記事……………	本多日生
○本部團報	
○法悅協會報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其二十五)……………	本多日生

第四十五年十月號

統

一

法財人團
統
一團發行